

# 聖バルバラ崇敬と図像 (1)

—フランスにおける聖女崇敬の成立と展開 (11世紀～16世紀)—

## The Image of Saint Barbara in France in Relation to the Origins and Development of Her Veneration (11<sup>th</sup>Century–16<sup>th</sup>Century)

黒岩三恵  
KUROIWA Mie



**Key words:** 聖バルバラ、美術史、フランス、中世、初期ルネサンス  
Saint Barbara, art history, France, Middle Ages, Early Renaissance

### Abstract

Saint Barbara is considered to be a widely popular saint in the end of the Middle Ages, especially in Germany and the Low Countries, but she appears to be less so in France. To fully grasp the relative indifference of the French, this paper will take a closer look at the veneration of the saint in France from its origins in the eleventh century to the sixteenth century. A thorough search of online databases as well as a closer examination of medieval inventories of the Valois princes, and catalogues of medieval (illuminated) manuscripts for monuments and artworks closely related to Saint Barbara bring out some interesting, and in a couple of cases intriguing, findings. While it is a well-established fact that Barbara was more venerated in Northern and Eastern regions of France, information gathered from the databases, inventories and catalogues shows a clearer picture of the geographical and historical dissemination/concentration of artworks pertaining to Saint Barbara throughout the French territory. Normandy and Burgundy, and to a lesser degree Brittany, are the regions that stand out for a higher concentration of art objects than has been suggested. Parisian region is another notable case, hitherto overlooked, for its dearth of artifacts about Saint Barbara on the one hand and the presence of two reliquaries of Saint Barbara on the other, sent from Constantinople and in the possession of two of the most powerful French princes around 1400. Breviaries and prayer books for private devotion made for the French court attest to the general indifference of the French royalty to the virgin martyr as they do not contain any mention of her up until the late fifteenth century, when the trend begins to reverse. These findings would also shed a new light on the private devotion of the Dukes of Burgundy, rulers of the Netherlands, for their deliberate choice of saints and prayers.

## 1. はじめに

処女聖バルバラの受難。皇帝マクシミアヌスの治世下、ニコメディアにバルバラという名の高貴な家柄の乙女がいた。類まれな美貌のゆえに、父親ディオスコルスは彼女を住ませようとして高い塔を建てた。バルバラは、密かに天の神を信仰していた。そこには浴場も隣接していたが、彼女の祈りによって突如として水で満たされた。バルバラは、三位一体のみ名において水が彼女を清めるよう天の恩寵の力に向かって祈り、天より降りてきた恩寵の力によって洗礼を授けられた。

多くのローマ市民がバルバラの父親に彼女を娶りたいと懇願したが、バルバラは拒絶してこのように答えた。「なんということでしょうか。私には天にキリストという伴侶がいます。私の身柄は汚れることなく永遠にキリストのものです」と。

父親は娘がキリスト教徒だと知ると、剣を抜いて切りつけようとした。バルバラは、逃亡して山中に身を隠した。追跡してきた父親が牧童たちに逃走する娘を見なかったか問うと、一人は否、と答え、もう一人は逃走した方角を指示した。そこで父親は駆けて行って娘を捕らえ家へ引き立てた。バルバラは密告をした牧童を見つめ、彼と羊を呪った。すると牧童と羊はともに大理石に変じてしまった。

後日、父親は判事マルシアヌスにわが娘の不正についてあらゆる告発をした。マルシアヌスはバルバラに出頭と神々への供犠と礼拝を命じた。しかし、聖女が神々への礼拝も供犠も行わないことを知ると、乙女の衣服をはぎ取って棒で痛めつけた。バルバラは、鞭打たれながら神へ讃美を歌って、偶像は虚ろで無用だと言った。マルシアヌスはバルバラを足から逆さまに吊り下げ、鼻から血がほとぼしり出て地に滴るまで鎚で頭部を殴打するよう命じた。恩寵が再びバルバラに臨んで、傷を翌日にはすっかり癒してしまったのを目にして、マルシアヌスは、彼女を拷問台に吊り下げて脇腹に松明の赤々と燃える炎を押しつけさせた。バルバラは天を仰ぎ見て祈りの中で判事に向かってこう言った、「ごらんなさい、哀れな者よ、この炎が苦痛ではなく涼しさを与えるからこの方が快い」と。

怒りにかられたマルシアヌスは、バルバラの両の乳房を切断し、國中を裸で引き回すよう命じた。しかし、バルバラは視線を天に向けて上げながら、「天を雲で覆い隠す主なる神よ、私の露わになった身体を周囲の異教徒たちが目にすることがないようにすっかり覆い隠すために、聖なる天使たちを結集してください」と祈った。見よ、主の御使いが純白な布帛でバルバラを完全に覆い、彼女の身体を元に戻し、傷跡の一つも見えなくなった。役人たちは群衆とともに彼女をとある街路を通じて判事の前へと導いた。マルシアヌスは、バルバラの身体がすっかり健全に戻り、顔が輝いているのを目にしたので、愕然と立ち尽くし大いなる憤怒に駆られて、聖女を斬首刑に処せとの命を發した。歓びに満ちたバルバラは、神の息子を拝み、こう祈った、「主よ私はお願いいたします、彼らの罪によって私を脅かさなさい。彼らの罪は私の殉教を篤く祝賀するのです」と。聖女は「アーメン」と締めくくった。

突如主の声が響きわたり彼女にこう言った、「来なさい、最も愛すべき者よ。天にあるわが国のしとねで休むがよい。まさにこの世で真の信仰をもって祈ったゆえに天に寢床を与えられるのである」と。

バルバラが山を登ってゆくと、聖女の父親が自らの手で娘の頭部を斬り落とした。すると、突如、目もくらむばかりの火災が天から父親の上に降り来たり、完全に焼き尽くしてしまったために一介の塵も残らなかった。この処女は12月5日〔ママ〕に殉教した<sup>1)</sup>。なお殉教録ではバルバラの祝日は12月16日と記されている。

以上は、バイエルン州立図書館が所蔵する、ドミニコ会士ヴァンサン・ド・ボーヴェ著『スペクルム・イストリアレ (略号 SH)』(1246-1259年頃執筆<sup>2)</sup>)の写本より「聖バルバラの受難」の逐語訳である<sup>3)</sup>。この写本は、数あるSH写本の中でインターネット上で電子複製が閲覧可能だったことが選択の決め手となったのは否定しがたい。だが、重要なのは、これが現存しないオリジナル写本に文献学的に最も近い、ディジョン写本の系統に連なるバージョンであり、引用テキストは宮廷を中心として13世紀後半以来、フランスで知られていたことが確実な聖バルバラ伝と見なすことが可能な点である<sup>4)</sup>。

千冊を超える現存写本数から膨大な読者を擁したことが明らかなるヤコブス・ダ・ウォラギネ著『黄金伝説』(1259-1266年頃執筆<sup>5)</sup>)から聖バルバラ伝を引用しないのは、(意外にも)『黄金伝説』には聖女の伝記が収録されていないからである。バルバラ伝が『黄金伝説』に追加されたのは、15世紀末のことだ<sup>6)</sup>。15世紀末以降に俗語訳版を含む『黄金伝説』の各地での刊行は、この聖人伝へのバルバラ伝の追加と同時期であり、バルバラを含む最新バージョンが収録された。その故か、『黄金伝説』を根拠に聖バルバラが西欧で古くから篤い信仰を集めたとの誤解が、最近でも繰り返されている<sup>7)</sup>。

対してSHは、成立時期がわずかに前後し、執筆目的も内容も『黄金伝説』とは性質を異にする。パリ大学で学問を修めたヴァンサン・ド・ボーヴェは、1246年から10余年の間講師lectorの職位でシトー派の王立ロワイヨモン修道院に滞在した。同院滞在の折にルイ9世聖王と交流を深め、複数の著書を聖王とその家族に献上している<sup>8)</sup>。その白眉が浩瀚な大全書『スペクルム・マイユス』である。その第3部にあたるSHは、32書にわたって天地創造から13世紀までの世界史を編纂したもので、『スペクルム・マイユス』全巻の中で比較的多くの読者を得た。後年、1332から1333年頃に聖王の孫娘で王妃のジャンヌ・ド・ブルゴーニュが俗語訳をジャン・ド・ヴィニエに命じた事実からもその成功がうかがい知れる<sup>9)</sup>。旧新約聖書や古代史の書籍を広く渉猟する同書において聖人らの伝記は、ローマ帝政末期、ディオクレティアヌス帝らによるキリスト教徒迫害の歴史の一環として記述される。その壮大な構想ゆえか、読者層はラテン語版はシトー一会を始めとする修道会や、俗語訳はフランス王家などの王侯等エリート層に限定される。

前置きが長くなった。本稿は、筆者が数年来行っているブルゴーニュ公フィリップ善良が所有した私的祈祷書類写本の研究の中で注目してきた、聖バルバラへの請願の祈祷と挿絵図像と関連

するものである（図1, 2）（黒岩 2020, 2021）。前稿で指摘してきたように、フィリップ善良公の祈祷書写本では、聖バルバラの請願は一群の聖人請願の中に含まれる代わりに写本の冒頭に近い箇所に孤立して配置されている。左記のような配置の理由を探り、バルバラ図像をよりつづさに考察することが本稿の狙いである。

バルバラ崇敬の伝播と受容の歴史から顧みると、ジェノヴァ大司教が編んだ『黄金伝説』ではバルバラ伝が選外だが、フランス王家の肝煎で編まれた『スペクルム・イストリアレ』には含まれている事実は意味深長に思える<sup>10)</sup>。両著書の典拠が相当重複することを踏まえると（Dondaine 1946）、バルバラの扱いの違いからは、二つの著書の成立にあたって著者と注文主（被献呈者）の積極的な関与を考えられる。殊に、以下に見るようにフランスでは、バルバラ崇敬が相対的に希薄だったと見られることから、彼女の聖人伝が『スペクルム・イストリアレ』に収録されたのは、篤い崇敬とは別個の選別の基準が働いたと推測する余地を与える。

実際に、フィリップ善良公の祈祷書写本に描かれた聖バルバラの挿絵を、本稿冒頭に掲げたSHに依拠するバルバラ伝と比較をしてみよう（図1）。父親が建てさせた塔を傍らに野外の草地に坐し、膝に置いた書物に触れる姿は、ネーデルラントを中心に15世紀中葉以降のバルバラ図像の



図1. 〈聖バルバラへの請願挿絵：聖バルバラ〉『フィリップ豪胆公の祈祷書』  
バイエルン州立図書館、Codex Gall. 40, f. 70v  
(©Bayerische Staatsbibliothek)

定型といえる。だが、塔を除けば、SHのテキスト内容と一致する要素は少ない。ここに見られるテキストとイメージの相違は、具体的には何に起因すると考えられるのだろうか。

周知のように、フィリップ善良公は、ディジョンからブリュージュに公国の拠点を移し、祖父フィリップ豪胆公、父ジャン無威公とは対照的にヴァロワ家本流とフランスから距離を置き、ブルゴーニュ公国内へと政治的・文化的な重点を移した。また、善良公の蔵書には、パリ使用式が多くを占める父祖伝来の祈祷書類も数えられるが<sup>11)</sup>、祖父から相続した『フィリップ豪胆公の大時禱書』が典型的に示すように、自己の嗜好に合わせた改編が行われることが少なくない<sup>12)</sup>。前稿で概観したように、善良公の祈祷書写本は、パリ使用式とブリュージュ使用式の混交、後年ほどブリュージュ使用式への移行が顕著となる(黒岩 2021)。善良公にとってのバルバラ崇敬の意義は、上記のような政治、文化、霊的实践等のフランスからネーデルラントへのローカル化の多面的なプロセスの文脈において考察することが重要だ。実際、バルバラ崇敬が最も盛んだったのはケルン大司教管区を中心とするドイツとネーデルランドであったことは先行研究の示すとおりである<sup>13)</sup>。フィリップ善良公の私的信仰とその実践について考察するにあたり、バルバラ崇敬の中心地であったネーデルラントの同時代的な状況に注目するだけでなく、父祖から継承したものに当たる、フランス由来の伝統にも目をむけて考察を試みたい。

本稿では、フランスにおけるバルバラ崇敬の展開について考察することとしたい。質の高い板絵や写本挿絵だけでも多数のバルバラ図像が確認されるネーデルラントにおけるバルバラ崇敬と図像が、単独で考察に値する研究課題であることは論を俟たない。対照的にフランスの場合は、



図 2. 〈聖バルバラへの請願挿絵：聖バルバラの殉教〉『フィリップ善良公の時禱書』  
オランダ国立図書館、KB 76 F 6, f. 19v  
(©KB, nationale bibliotheek)

少なくとも美術史研究においては同地がバルバラ崇敬が盛んな地域だとは見なされず、研究の少なさがバルバラ崇敬と図像の展開の様態をつぶさに検討することを要求する。ブリュージュを中心とするネーデルラントの状況を取り扱う後編に対して、本稿は二部構成の前編と位置づけたい。

本稿の構成の概要を記す。以下、第2節では、西方カトリック教会圏におけるバルバラ崇敬の伝播の歴史の輪郭を、バルバラの聖人伝、聖歌・典礼式文を中心にテキストとその研究史を概観することで明らかにする。第3節では、まず、先行研究によってフランスにおけるバルバラ崇敬・巡礼地について確認し、ついで現存する動産美術・文化遺産<sup>14)</sup>を通じて、バルバラ崇敬とバルバラ図像の特性について確認する。その際、フランス文化省管轄の電子データベースをはじめ各種のカタログに依拠し、フランスにおけるバルバラを主題とする美術作品とその分布を明らかにする。作品の制作年代を手がかりに、フランス諸地方におけるバルバラ崇敬の伝播の経緯を推察し、13世紀以降のパリを中心とするフランスにおけるバルバラ崇敬を理解するための手がかりともするつもりである。第4節では、彩飾写本を検討する。バルバラ図像の成立と展開について、SHを含む聖人伝写本や私的祈祷書類写本へのバルバラ請願祈祷の掲載の有無、バルバラ図像を含む、テキスト、イメージの流布と展開、公的・私的信仰の実践との関わりの特徴について概観する。

なお、本稿におけるフランスとは、中世のフランス王領、親王采地、家臣の領地などを含有する封建的な地域を念頭に置きつつ、便宜上、今日のフランスを意味する。対象とする年代は、中世とルネサンスであり、具体的には12世紀から16世紀までである。17世紀からのバロック期以降のバルバラ崇敬の高まりと美術の隆盛については、本稿の射程からは外れるものとして言及しない<sup>15)</sup>。

## 2. 聖バルバラをめぐるテキスト：概要と研究の現状

以下に続く第3、第4節でフランス、また後編でネーデルラントにおけるバルバラ崇敬を取り扱うのに先立ち、本節ではバルバラ崇敬と聖人伝について、フランスを中心とするテキストと先行研究を概観したい。まず強調すべきは、バルバラに関わるテキストの豊富さと各々の成立と伝播の複雑さである。先行研究に倣ってこの錯綜した領域に分け入る<sup>16)</sup>という誘惑には抗しがたいが、本稿では各テキストの内容や文献学的な知見の詳細には触れず、主要テキストの成立を中心にその概要を提示するにとどめたい。

3世紀に殉教したと伝えられるバルバラは、1969年にカトリック教会が聖人暦から削除したように実在性が希薄な聖人である。そのためだろうか、数ある聖人伝の内容も却って空想性豊かな多彩さを誇る。しかしながら、西方へはシリアやギリシャなど東方からバルバラ崇敬がもたらされたとするには異論がない一方で、その始まりと伝播のプロセスについては不明の点が多い<sup>17)</sup>。15世紀に至って爆発的と呼んでも良いほどドイツ<sup>18)</sup>とネーデルラントでは<sup>19)</sup>バルバラへの篤い信仰が高まりを見せたことは周知の事実である。熱意においては劣るが、イタリア、フラン



ス<sup>20)</sup>、スペイン、北欧 (アイスランド<sup>21)</sup>)、イギリス<sup>22)</sup> でもバルバラの崇敬が認められる。バルバラ崇敬は、他の主要殉教処女聖人たち、例えばアレクサンドリアのカタリナやローマのアグネスらと比較すると、時間的にも地理的にも局所的な偏りが顕著なことが特徴的である<sup>23)</sup>。

バルバラの聖人伝テキスト研究は、ラテン語とともに、フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語、アイスランド語等の中世俗語文学の研究が断続的になされてきた。聖歌や典礼式文を含めるとラテン語文学が俗語諸語を圧倒するが、俗語文学研究では、フランス語、ネーデルラント語ならびにドイツ語で書かれた作品の研究が質・量ともに大きい。

まず、ラテン語テキスト研究では、ボランディスト協会による聖人伝研究がまず挙げられる。殉教聖人年鑑や各種の聖人伝、年代記や歴史書などのテキストを網羅的に調査・整理した『ビブリオテカ・ハギオグラフィカ・ラティナ (ラテン語聖人伝集成、略号 BHL)』や、個々の聖人を 1 月から始まる典礼暦順に編纂した『アクタ・サンクトルム (聖人たちの事績)』は、聖人の研究者が最初に繙く基本資料である<sup>24)</sup>。しかし、同書は 11 月の第 1 巻を最新巻として 11 月中旬から 12 月の巻の刊行が待望されて久しい。ボランディスト関連の資料を公開するベルギー王立図書館ウェブサイトも、2021 年 11 月時点ではバルバラの祝日に当たる 12 月 4 日の資料は未公開である<sup>25)</sup>。

他方、ドレーヴェ他編集、全 55 巻から成る『典礼式文・聖歌集成 *Analecta hymnica* (以下、略語 AH とも表記)』では、第 4 巻から第 25 巻に散発的に聖バルバラの典礼式文・聖歌が収録されている<sup>26)</sup>。AH の典礼式文・聖歌は、東はクラクフから西はトレドまで、13 世紀から 16 世紀の写本と刊本から採録されたもので、聖務日課書等が収録するバルバラ典礼のテキストの要覧を見ることが可能である。しかし、収録テキストの歴史、換言すると最古と最新の使用例についての情報は不在である。また、時禱書に代表される私的信仰のためのラテン語および俗語による祈祷文を含むパラ典礼文の実情については、フランス語の祈祷文に関する論考を別にすれば<sup>27)</sup>、包括的な研究が待たれる状況にある。この点については、フランスの状況について、調査し得た範囲で以下、第 4 節で言及することになろう。

つぎに、俗語文学研究のなかでは、複数の韻文および散文の聖人伝、聖史劇に関する個別研究が早くから盛んであったフランス語文学の先行研究が充実する。

韻文では、13 世紀末から 14 世紀初頭に成立したと推定される 8 音節・512 詩行の『聖バルバラ伝』<sup>28)</sup>、15 世紀の 12 音節 4 詩句 112 連の『いとも栄えある聖女バルバラ伝』、が知られている<sup>29)</sup>。そのほか、15 世紀のブルゴーニュで使用されたと推定される祈祷文形式のバルバラ伝<sup>30)</sup>、同世紀のバルバラへのラテン語賛歌や祈祷文に先行して聖女伝を記載するセレスティヌス会またはフランチェスコ会旧蔵写本<sup>31)</sup>、14 世紀末リモージュ使用式の祈祷書写本に収録され、ラテン語によるバルバラ請願の一連の式文テキスト 2 種に先行する、フランス語によるバルバラのとりなしを願う賛歌が知られている<sup>32)</sup>。

散文の聖人伝としては、上述の『スペクルム・イストリアレ (SH)』のジャン・ド・ヴィニエによる俗語訳『ミロワール・イストリアル (MH)』所収の「聖バルバラ伝」が、1333 年頃に翻訳されて早くに成立したフランス語散文の聖人伝に数えられる<sup>33)</sup>。その後、1400 年頃にフランス

の廷臣たちの間に勃発した薔薇物語論争において女性擁護の論陣を張ったクリスティーヌ・ド・ピザンが、1405年頃に王妃イザボー・ド・バヴィエール、ベリー公ジャン、ブルゴーニュ公ジャン無畏らを被献呈者とし、ボッカッチョの『名婦伝』に倣って著したのが『貴婦人の都』である。この古代から15世紀までの傑出した100余人の女性の列伝の第3部に、バルバラが数えられる。簡潔化されて文言に違いが目立つとはいえ、バルバラ伝のあらすじは『ミロワール・イストリアル(MH)』とほぼ対応するため、クリスティーヌはMHを参照してバルバラ伝を編纂したものと考えられる一方、『貴婦人に都』の目次で、バルバラが東ローマ的な「大殉教者」という敬称を冠して表記されていることはMHとは別系統のバルバラ伝の伝播経路の介在を推測させる。フランス宮廷の文芸サークルにおけるバルバラ伝の浸透を証拠立てるだけでなく、詳細な検討にも値する例である<sup>34)</sup>。15世紀後半には、シャルル7世王女ジャンヌ・ド・ブルボンが所有した1470年代の写本に収録された散文詩形式の『聖バルバラ伝』が知られる<sup>35)</sup>。

聖バルバラ聖史劇は、少なくとも3編が知られる<sup>36)</sup>。まず、15世紀末または16世紀初頭に確立したと推定される『5日間上演版聖バルバラ劇』は、出演者が百余名、韻文の戯曲は2万行を超え、複雑なト書きにもかかわらずアミアン(1448年)、コンピエーヌ(1475)、アンジェ(1484)、メス(1485)、ラヴァル(1493)、ナンシー(1505)、ドマラン(1509)、リモージュ(1533)、ペロンヌ(1534)、サン＝ニコラ＝ポール(1537)、ティルピエ(1539)と、各地での上演の記録が残る<sup>37)</sup>。また、16世紀だけでも複数の刊本によってその人気の高さを推測できる『2日間上演版聖バルバラ劇』は、38名の出演者と3500行余りの台詞によって構成される<sup>38)</sup>。3番目の戯曲は、バルバラ役の台詞の一部のみが現存し、16世紀にモーリエヌで上演した記録があるバージョンである<sup>39)</sup>。

上述のように上演の記録は、ピカルディ、ロレーヌ、サヴォワ、ノルマンディ、中西部などフランス北東部の諸地方が目立つ一方、16世紀以降の刊行物の出版元はリヨン、パリなどオイル語使用圏の主たる出版業の中心地を網羅し、フランス全土を挙げたバルバラ聖史劇の人気の高さをうかがわせる。また、1557年の刊本によって、中世ブルトン語によるバルバラ聖史劇の存在が知られる<sup>40)</sup>。

以上のように、フランスにおける聖バルバラをめぐるテキストの種類と成立年代を概観すると、俗語テキストの最も早い成立時期は13世紀から14世紀だが、15世紀以降にジャンル・量ともに大きく飛躍する状況が垣間見える。研究が先行したネーデルラントやドイツと状況は異なる部分が小さくないにせよ<sup>41)</sup>、15、16世紀にバルバラ崇敬熱が爆発的に上昇する傾向は類似すると見てよいだろう。

### 3. 文化遺産に見るフランスにおける聖バルバラ図像と崇敬

#### 3.1 本節のねらい

第2節で概観したフランス語で書かれた多様な形式のバルバラ伝からは、盛んな聖人崇敬が想



像できるが、美術史の観点だけではなく、典礼写本や私的祈祷書写本の内容から鑑みると、フランスでのバルバラ崇敬は注意してとらえる必要があることが浮かび上がってくる。以下では、美術作品をととしてフランスでのバルバラ崇敬を概観する。フランス文化庁が管理する文化遺産データベースを利用し、バルバラ図像の件数、分布を含む実態を考察する。さらに、現存しない文化遺産に関しては、既刊の中世期の財産目録の記載を参照してバルバラ図像の普及の復元を試みる。

### 3.2 フランスにおけるバルバラ崇敬：聖遺物と巡礼

バルバラの殉教地はニコメディアの他、ローマやトスカーナ地方とする聖人伝が複数ある<sup>42)</sup>。また、その聖遺物がローマついでピアチェンツァに移遷されたとするバージョンもあり、西方における彼女の聖遺物への崇敬を反映している。さて、フランスでのバルバラ崇敬の最も早い例は、ノルマンディー、オージュ地方に見いだされる。今日のメズィドン＝ヴァレ＝ドージュ市に、同地の領主スティガン家のオドン1世によって11世紀半ばにマルティヌスに奉獻された聖堂参事会が設立された。オドン1世は、ノルマンディー公の最側近の一人で、聖堂の建立は、ロベール公に随行する聖地への巡礼が公の客死によって中断後、帰郷してからのことである。オドンの二人の息子は、11世紀後半に入れ替わりコンスタンティノポリスの宮廷に赴き、それぞれ数年間、武芸の腕を磨きながら廷臣として東ローマ皇帝に仕えたとされる。東ローマ帝国の都からバルバラの聖遺物を持ち帰ってきたのは、次子ロベールであった<sup>43)</sup>。バルバラの聖遺物の安住の地となった聖堂参事会は、バルバラに奉獻されて、その名もサント＝バルブ＝アン＝オージュ小修道院へと改組された。ノルマンディ公国ばかりではなく、フランス王家からも寄進が寄せられたという。ビザンティンからもたらされた聖遺物という権威ある来歴によってサント＝バルブ＝アン＝オージュはバルバラ崇敬の巡礼先ともなったようである<sup>44)</sup>。

この他、ブルターニュ地方の例として、1460年から70年頃に制作された銀製の聖遺物容器が以下、3.3節でも概説するフランス動産美術・文化遺産データベース Palissy より確認される<sup>45)</sup>。モルビアン県ル・ファウエット近郊のサント＝バルブ礼拝堂は、伝承によれば、15世紀末の地元の城主が狩猟中の落雷からの防護をバルバラに感謝して建立した聖堂である<sup>46)</sup>。

ル・フェットのサント＝バルブ礼拝堂の建立年代は、上記2節で言及したブルトン語によるバルバラ聖史劇とも関連づけられるように思われる。以下、3.3節でもみるように、ブルターニュではバルバラ崇敬が比較的盛んであったと見られるが<sup>47)</sup>、その実情に関する先行研究は少ない。ル・フェットの場合、雷からの守護聖人として崇敬されたと見られることから、近隣するノルマンディが聖女崇敬の直接の伝播経路とは考えにくい。むしろ14世紀末から15世紀中葉に成立するフランス語のバルバラ伝文学からの影響のもと、地域独自の成立を見るべきであろう。

ノルマンディーとブルターニュにおけるバルバラ聖遺物と巡礼路の存在は、中世以来フランスにバルバラ崇敬が根づいていたことを確かに示す。しかしながら、ヴァンサン・ド・ボーヴェ編纂の『スペクルム・イストリアレ (SH)』にバルバラ伝が収録される13世紀後半まで、フランスの権力の中枢であるパリあるいは宮廷におけるバルバラ崇敬が連続的に伝播し、発展したこと

を伝える史料を見出すのは難しい。

### 3.3 文化遺産に見るバルバラ：崇敬の分布と図像

このパラグラフでは、歴史的建造物、美術館所蔵品、動産美術・文化遺産の中からバルバラに由来する作例について、フランス文化省が管轄する各種のデータベースを利用してマクロ的な視点からフランスでのバルバラ崇敬の伝播と普及の痕跡を見出すことを試みる。手がかりとしてバルバラを主題とする彫刻や絵画などの美術作品の状況について検討する。そもそも、《聖バルバラ(像)》と聞いて即座に連想するような代表作がフランス美術史上存在しないことが、フランスにおけるバルバラの位置づけを象徴してきたかのようなのである。より詳細に実態を把握するために、かつて存在したものを含む、聖女に奉献された大小の聖堂、チャペル、修道院、または歴史的建造物を装飾していたバルバラ像の記録などを探求するのだろうか。

まず、このパラグラフ 3.3 で援用する手法について確認しておく。歴史的建造物にせよ美術コレクションや文化遺産にせよ、古典的な美術史研究では作例ごとの詳細な各論を行うのが定石である。各論を蓄積し、統合することによって経験論的にある種の全体図を帰納していく従来の研究手法を本稿では採用しないのは、いくつかの理由がある。繰り返しになるが、個別のバルバラ図像について考察する前提となるべき 16 世紀以前のバルバラ崇敬の実態を知ることが本稿の目的であることがまず挙げられる。第二に、特に動産美術・文化遺産で顕著であるが、2000 件にも迫るデータの各々について個別研究を重ねていくことは物理的に不可能に近い。とりわけ彫刻家ジャン・ド・ラ・ユエルタら著名な芸術家に連なる作例から (図 3)、ブルターニュの片田舎の聖堂に安置される素朴な郷土玩具に似た作例まで (図 4)、造形表現の幅の広さそのものは非常に興味をそそられる対象である。だが、この多彩な造形性に加え、祭壇装飾、スタンドグラス、聖職者の礼服、墳墓装飾等の機能、図像類型による分類や作例相互の影響関係は、あきらかに今後研究するに値するテーマだとしても、15 世紀中葉のブルゴーニュ公の宮廷美術へとつながる論点は、現時点では見出しがたい。本稿ではあくまでバルバラ崇敬の痕跡・証拠としてバルバラを主題とする作例を量的に取り扱うつもりであることを改めて強調しておきたい。

以下でみるとおり各作例を地域別・年代別・技法・機能別に分類するカタログ形式の記述を特徴とする各種データベースで、地域と年代のデータを利用することにより、バルバラ崇敬の証拠となる聖女を主題とする美術作品の地理的・歴史的な展開を把握が期待できる。他方、1600 年以前に制作された作例が現存する事情は個別に異なり、戦乱・革命運動等の社会的変動の影響を考慮すると、バルバラを主題とする美術作品、換言すればバルバラ図像と言う母集団を正しく評価し、必要に応じて統計的な数理処理を行うべきなのかどうかという判断を含めて、広義の社会科学的研究手法を採用しうるだけの知識と経験が筆者には欠けていることも間違いがない。この点については今後の課題となろう。

まず、聖堂建築から検討する。記念碑的建造物を扱うフランス文化遺産データベース (Mérimée) でクエリを「聖バルバラ (sainte Barbe)」として簡易検索した結果、442 件がヒットした<sup>48)</sup>。さ

らに制作年代を 1600 年以前として絞り込み検索を行った結果、バルバラに奉献されたチャペル、祈祷堂、聖堂などの所在地の分布は、地域圏ごとに分類すると以下のようになる。ブルターニュ地域圏が 14 件、グランテスト地域圏が 7 件、ノルマンディ地域圏が 6 件、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏が 4 件、ペイ・ド・ラ・ロワール地域圏 2 件、オーヴェルニュ＝ロンヌ＝アルプ、プロヴァンス・アルプ＝コート＝ダジュール、ヌーヴェル＝アキテーヌの各地域圏が各 1 件となった。なお、ネーデルラントに隣接するオ＝ド＝フランス地域圏を筆頭に、イル＝ド＝フランス、サントル＝ヴァル＝ド＝ロワール、オクシタニーの各地域圏からは 1 件もヒットしなかった。該当する建造物は、いずれも村落等の小規模自治体の簡素な教区聖堂建築で、16 世紀ついで 15 世紀建造と記録されている。フランス北部に 15 世紀後半以降にバルバラに因む宗教建造物が農村地帯に至るまで普及していた様相が認められる。なお、データベース Mérimée に登録されるのは、独立した聖堂建築の全体である。聖堂側廊に設置されたチャペルにバルバラに奉献された例は、データベースからは検索ができなかった。こうした聖堂付属チャペルの実態を加えることで、バルバラ崇敬の拡がりをより正確に理解することにつながることは間違いない。今後の課題としたい。



図 3. 《聖バルバラ立像》ジャン・ド・ラ・ユエルタ工房、15 世紀  
コット＝ドール県スール市  
データベース番号 PM21002260  
(©Monuments historiques)



図 4. 《聖バルバラ立像》15 世紀  
モルビアン県ランヴォーダン市サン・メルク礼拝堂  
データベース番号 PM56004656  
(©Monuments historiques)

つぎに、美術作品について検討しよう。フランスの国立美術館の所蔵コレクションのデータベース（Base Joconde）で、「聖バルバラ（"sainte Barbe"）」をクエリとし、簡易検索を行った。その結果、974件の作例が該当した<sup>49)</sup>。ついで、制作年代を1600年以前として絞り込み検索を行い、290件の作例が残った<sup>50)</sup>。ここから、イタリア、ネーデルラント、ドイツなどフランス国外で制作された作例とともに、簡易検索によってヒットした無関係な作例を除外し、40件弱の美術作品が残った。地域圏ごとに件数をまとめると、地域を特定しないフランスへ帰属された作例が6件、ノルマンディーおよびグランテスト地域圏が各々6件と最も作例の数が多い地域となっている。次いで、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏が5件、イル＝ド＝フランスとオ＝ド＝フランス地域圏が各3件、ペイ・ド・ラ・ロワール地域圏が2件、サントル＝ヴァル・ド・ロワール、ヌーヴェル＝アキテーヌ、オクシタニー地域圏が各1件と続く。左記の作例は、2点の油彩画、2点の銅版画を除くとすべて彫刻である。彫刻は、いずれも元は聖堂に安置されていたものが美術館へと移管されたものと考えられる。作品数の少なさから確実な傾向を看取することは困難であるが、フランス東部の諸地方で作例が多い傾向は見取れるのではないかと推察される。

つづいて動産美術・文化遺産データベース（Palissy）での同様の検索では、地方自治体や教会等が所有する彫刻や絵画など4514件がヒットした<sup>51)</sup>。このうち、17世紀以降の作例を除外すると、1831件が残った<sup>52)</sup>。地域圏とともに県ごとにデータベースの作例を整理すると、バルバラを主題とする作例はすべての地域圏で認められる一方、分布の粗密については大きなばらつきが認められるのが特筆される。

バルバラを主題とする文化遺産の分布の傾向は、以下のように要約できる。地域圏ごとの作例分布の概数は、オ＝ド＝フランス地域圏が約110件、ノルマンディー地域圏が約340件、ブルターニュ地域圏が約130件、グラン＝テスト地域圏が約270件、イル＝ド＝フランス地域圏が約70件、サントル＝ヴァル・ド・ロワール地域圏が約60件、ペイ・ド・ラ・ロワール地域圏が約50件、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏が約200件、オーヴェルニュ＝ロアンヌ＝アルプ地域圏が約20件、ヌーヴェル＝アキテーヌ地域圏が約15件、プロヴァンス＝アルプ＝コート＝ダジュール地域圏が約15件、オクシタニー地域圏が約20件である<sup>53)</sup>。大まかな動産美術・文化遺産の分布は、ブルターニュから南東に引いた対角線によりフランスを二分する北半分で密度が高く、南半分では顕著に低密度だと言える。この東高西低の傾向は、先行研究で指摘されてきたオ＝ド＝フランス地域圏での炭鉱夫を中心とするバルバラ崇敬の篤さとも一見一致するように思われる。だが、県単位で動産美術・文化遺産の分布を検討すると様態はより複雑である。

ドイツ語圏を含むグラン＝テスト地域圏の件数が多いことは、ドイツにおける先行するバルバラ研究からも首肯できる傾向である。反対に、上で言及したベルギーに隣接するオ＝ド＝フランス地域圏の作例の少なさは意外とも言える。同地が二度の世界大戦などの戦災に繰り返さらされたことが一因だろうか。最も作例が多かったのは、ノルマンディー地域圏である。上記パラグラフ3.2で言及した聖遺物を擁するサント＝バルブ＝アン＝オーギュ修道院のお膝元として、特に聖女への崇敬が盛んだったと推察することも可能だ。ただし、直接の地元であるカルヴァドス

県の作例は 17 件とさほど多くない。突出してバルバラを主題とする作例件数が多いのが旧オート＝ノルマンディー地域圏を構成したウール県の約 160 件、次いでセーヌ・マリティーム県の約 110 件である。

このような県単位で分布の粗密が同一地域圏内でも認められる。コート＝ドール<sup>54)</sup>、ヨンヌ<sup>55)</sup>、オード<sup>56)</sup>、サルト<sup>57)</sup>、ムルト＝エ＝モゼル<sup>58)</sup> の各県で件数が大きいことは、ディジョン、ヨンヌ、トロワ、ル・マン、ナンシーといった封建諸国の首都を擁し、各地の要衝として機能したことと無関係ではあるまい。ただし、同様の条件を備えたフランス南西部の封建諸国でのバルバラを主題とする動産美術・文化遺産が少ないことの説明と合わせ、動産美術・文化遺産が安置されている聖堂の所在地の分布を含めたより包括的な分析が必要である。同様に、イル＝ド＝フランス地域圏では、イヴリーヌ県で比較的多くの作例が確認される一方で<sup>59)</sup>、中心地パリ市および隣接するセーヌ＝サン＝ドニ、ヴァル＝ド＝マルヌ、オード＝セーヌの各県で確認される件数は皆無と云っていい。宗教戦争、革命、都市の再開発に伴う種々の破壊がその背景にあると見られるが、データベースの特性など文化財登録の方法と限界など、多角的な視点からその理由を考える必要があるだろう。果たしてフランスの中心部でバルバラ崇敬が人気がなかったと言えるのか。宮廷が置かれたパリでのバルバラ崇敬と美術制作との関係について、以下パラグラフ 3.4 および第 4



図 5. 《聖バルバラ立像》16 世紀  
 オープ県トロワ市サン＝ジャン＝オ＝マルシェ教区聖堂  
 データベース番号 PM10002391  
 (©Monuments historiques)



図 6. 《聖バルバラ小像》16 世紀  
 ウール県ブルタニョール市ノートルダム教区聖堂  
 データベース番号 PM27000393  
 (©Monuments historiques)



図7. 《ステンドグラス：聖バルバラの殉教》16世紀  
オルヌ県シャン村サン＝エヴルー教区聖堂  
データベース番号 IM61004053 (©Région  
Basse-Normandie - Inventaire général)

節で、同時代的な貴顕の財産目録を参照して補完的な考察を行うつもりである。

作例は、16世紀ついで15世紀に制作されたものが大部分を占め、14世紀以前に制作されたものは少ない<sup>60)</sup>。

以上、フランス文化庁が管轄する3種のデータベースを利用した簡易検索の結果を単純に数え、地理的な分布から見える傾向を整理した。そこからうかがえることは、バルバラに奉献された聖女の名を冠した聖堂、彫刻、絵画、聖職者の礼服の刺繍飾りに表されたバルバラ像、バルバラ伝を描いたステンドグラス、バルバラの聖遺物容器等の動産美術・文化遺産の分布はともに、フランスの北部と東部に偏っているという傾向である。

バルバラ図像についてはデータベースに画像のないエントリーが相当ある点に留意する必要があるが、アトリビュートを伴った立像が大部分を占める(図3-6)。塔、棕櫚の枝、書物がバルバラのアトリビュートだが、塔が聖女同定の決め手であり、残る二つのアトリビュートはいずれか一つを携えている場合も多い。二つまたは三つのアトリビュートをどのように伴っているのか、聖女のポーズにはバリエーションが認められ、その美貌を引き立てる華麗な服飾に意が用いられた作例も確認される。また、アトリビュートを伴う立像に比較すると数はぐっと減るが、バルバ



ラが父親の手にかかって殉教する場面がバルバラを主題とする単一場面の作例として複数確認される<sup>61)</sup>。殉教の場面はステンドグラスならびに写本挿絵により多い(図7、13)。

他方、15世紀後半からドイツで目立つ、聖体を乗せた聖杯を手にするバルバラ像は、アルザス地方に2件を除けば、フランスで普及することがなかった図像タイプだと結論づけて差し支えない<sup>62)</sup>。同様に、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンやヤン・ヴァン・エイクの油彩画やフィリップ善良公の時禱書にみるようなバルバラ坐像は、15世紀以前のフランスの美術作品には認められなかった。

### 3.4 財産目録に見るバルバラ崇敬と図像

さらに、フランスでのバルバラ崇敬と図像の展開を知るために、失われた作例について考えてみたい。具体的には、フィリップ善良公の血縁に当たるヴァロワ家の財産目録を参照した<sup>63)</sup>。前パラグラフ等で扱った、フランス全土の教区聖堂等に現存するバルバラ像が教会と会衆両者のいわば草の根の宗教感情に根差したと考えられるなら、このパラグラフで検討することになるのは、最高権力者たちにとってのバルバラとの関わりである。芸術的な水準の点など違いも大きい、信仰の発露の点において両者は矛盾するものではなく、補完的である。本稿では、14・15世紀の財産目録について、閲覧が容易な刊本を参照するにとどめた。限定された範囲ながら、一定の傾向を抽出することが期待できるからである。

参照した財産目録は、フィリップ善良公の大伯父たち、フランス王シャルル5世(1338-1380)、アンジュー公ルイ10世(1339-1384)、ベリー公ジャン(1340-1416)、従伯父シャルル6世(1368-1422)を中心とした。以下では、古い財産目録から順に、バルバラを主題とする私財の有無、バルバラ以外の聖女の傾向について概観する<sup>64)</sup>。

フランス王ジャン2世の次子、アンジュー公ルイ1世の金銀細工財産目録は、金銀宝飾品・七宝細工等の貴金属工芸を目録化した資料である<sup>65)</sup>。1378年に作成された同目録は、豪華な宮廷文化を記録するが、バルバラ崇敬やバルバラと美術の関係について、両義的な傾向を示唆する。聖人を主題とする動産は、「チャペルに保管される金製品」(目録番号 inv.nos. 1 から 31)ならびに「チャペルに保管される銀製品」(目録番号 297 から 644)に分類・登録される。聖櫃、十字架、聖杯等の機能別に再分類された美術品では、以下の例が注目される。聖母子を中心として男女の聖人を配した典雅な作風の、かぐわしい緑地のテラスを持つ庭園をかたどったり、最も重いもので290マルク近い黄金製の精巧な聖櫃などでは、聖母に寄り添うのはカテリナが筆頭である<sup>66)</sup>。他の聖女では、マルガリータ<sup>67)</sup>、マグダラのマリア<sup>68)</sup>、アグネス<sup>69)</sup>が続く。15世紀以降の聖会話図像を予告するようなこれらの貴金属工芸品で、聖なる宮廷のメンバーとしてバルバラが加わることはない<sup>70)</sup>。また、目録番号459から467には銀製の聖女の単独像が登録されている。マルガリータ<sup>71)</sup>、ウルスラ<sup>72)</sup>、マグダラのマリア<sup>73)</sup>、マルタが各2体<sup>74)</sup>、カテリナが3体確認される<sup>75)</sup>。目録の巻末近くに登録された銀製七宝細工の小型タブロー画の2点で、男女の聖人が描かれる<sup>76)</sup>。1点では洗礼者ヨハネ、クリストフォロス、マルガリータとカテリナが、もう1点にはペテロ、

パウロ、マグダラのマリアとカテリナが描かれている。巻末にはまた、現在ルーヴル美術館が所蔵する、ルイ1世の財産目録の唯一の現存作例として知られている1対の金製七宝工芸の円形鏡面が登録されている。1点の鏡の裏面にはシャルルマーニュ、キリスト、洗礼者ヨハネが、もう一方には福音書記者ヨハネ、聖母子、カタリナが表されている<sup>77)</sup>。したがって、ルイ1世にとってバルバラ崇敬は縁遠いものだったと推測可能である。

その一方で、バルバラに関連する唯一の記録が目立つ。「鍍金銀製天使像」という項目 (inv. nos. 392-410) のなかに、七宝製の聖人像で装飾された六角形の台座に乗り、「聖バルバラにちなむ (De sancta Barbara)」と記銘された聖遺物容器を右手で携える鍍金銀製の天使像の記載がある<sup>78)</sup>。この天使像は、同一の意匠を持ち「聖ヨアンネス・クリュストモスにちなむ (De sancto Johanne Crisostomo)」と記銘された聖遺物容器を左手で携える天使像と対であると明記されている<sup>79)</sup>。この聖遺物容器一対の意匠は、財産目録の記述からは異国からの招来品と断定できる要素は認めがたい。他方、バルバラとヨアンネス・クリュストモスの聖遺物を対としている点において、東方由来の、記銘によって強調されるべき珍重品であったことが窺える。

アンジュー公の財産目録の1年後、1379年を通じて王宮ごとに作成されたのが長兄シャルル5世の財産目録である (Labarte)。ここでは、各々の評価額の記載に重点が置かれ、機能、材質と形状とともに造形的な特徴に関しては「人物像が表された」程度のごく簡潔な記述のみなされる傾向がある<sup>80)</sup>。記述がある項目では、アグネス、カタリナ、エリザベツ、マグダラのマリア、アンナ、マルガリータといった聖女の名が見える。聖母を別格としてカタリナが表された物品が最も数多く、シャルル5世の誕生日を祝日とするアグネスとマグダラのマリアがそれに続く。シャルル5世の財産目録では、バルバラに由来する美術品は確認できなかった。

シャルル5世が遺した王家の財産はその子シャルル6世 (在位 1380-1422) に引き継がれた。同王の1400年に作成された財産目録がアンヴッドにより刊行されている (Henwood)。2千余点にのぼるシャルル6世が所有した財宝では、聖母を別格としてアグネスの数が多く、カタリナ、マグダラのマリア、マルガリータ、エリザベト等の聖女が続く。顔ぶれはシャルル5世の場合と共通する。実際、アンヴッドが註にまとめた、シャルル5世歿時の1380年からシャルル6世歿時の1422年までの複数の王室財産目録との照合から、これらの財宝は若干の近親者からの贈呈品を除けば父シャルル5世から相続したものが大半を占めることが看取される。またシャルル6世が新たに注文したと思しき聖人図像を含む作例がほとんどない点も特筆に値するが、このことを含めて、父王の聖人崇敬と財宝をただ踏襲し、宗教美術への関心が低い芸術パトロネージのありようが垣間見える。シャルル5世の場合と同様、1400年時点のシャルル6世の財産目録では、バルバラの名を見出すことはなかった。

ベリー公ジャンの財産目録は、1402年、1406年、1416年作成の3冊がギフレーにより一冊の刊本に編集されている (Guiffrey)。おのおのの財産目録の作成者によって多少の記述の相違があるものの、図像を伴う動産美術品の記述は、表現されている主題、人物の同定が詳細に行われている点に特徴がある。また、城館の特定の部屋、付属礼拝堂などの同一空間に保管された財産の

一切が目録化されるため、宝飾品、聖遺物容器、祭具、衣裳、室内装飾品、書籍等に分類されるとはいえ、同一目録内に多様な財産が記載されて雑多な印象を与える。以下、ギフレーの刊本を参照しながら、ベリー公の財産目録を年代順に検討する。

最も古い1402作成の財産目録に、ベリー公が所有した聖遺物の一つとして、バルバラの肋骨がある<sup>81)</sup>。目録によれば、ギリシャ様式の皇帝夫妻像と聖母子像が外面に刻まれた銀製の聖遺物箱の中にザカリアの肋骨とともに納められたものが、コンスタンティノープルよりジャン・ド・シャトーモランによってもたらされたとある<sup>82)</sup>。

この他、ジャンの財産には複数の聖遺物が含まれ、中には30近い聖人の聖遺物を納めた象牙製の装飾箱も含まれる<sup>83)</sup>。ベリー公の領地由来の聖人から使徒たちまで多種多様な聖人の遺物が記録される中に、バルバラの名はない。

また、シャペルと総称される典礼に用いられる聖職者の礼服、祭壇掛布、壁掛け等から構成される刺繍染織工芸品の一式には、聖母伝、キリストの幼年時代や受難の場面が表されたものがある。それらの主場面に添えられる聖人像には、使徒たちとともに教父、司教、童貞殉教聖女らが数えられる<sup>84)</sup>。童貞殉教聖女で頻度が最も高いのがカテリナである。ついでマルガリータ、アグネスが続く。証聖者としてはハンガリーのエリザベトの名も見える。バルバラが「聖女たち」、「殉教者たち」などのように記述される、聖人の集団の中に描かれている可能性がないわけではないが<sup>85)</sup>、彼女が同定されていないのは示唆的である。同様に、バルバラがベリー公の宮廷では親しく崇敬される対象ではなかったことを示すのは、大小数十もの別布から構成される、宝石をちりばめて刺繍を施した祭壇用の飾りである<sup>86)</sup>。この祭壇飾りに表された聖女のみを抽出しよう。まず、主場面である聖母の戴冠へシャルル5世夫妻と王子たちを取りなす聖人たちの中に、王妃のとりなしを行うカテリナが表される。別布の全身像として表された聖女にはマグダラのマリアとユディトが数えられ、また24枚の別布には、王妃ウルサ、スコラスティカ、ルチア、アグネス、マルガリータの半身像が数えられる。男女総勢36名の聖人が名指しされるこの祭壇装飾では、ユディトや王妃ウルサなど知名度の低い聖女もみえる。フランス王一家を中心とするこの祭壇飾りは、ギフレーの解説によれば長年シャルトル大聖堂の内陣にかけられ、1628年に参事会会員エステエンヌによる同大聖堂宝物目録に記載が見られるという刺繍飾りと同一と見なされている<sup>87)</sup>。ベリー公の財産目録に記載される種々の動産美術品の来歴の詳細は不明だが、いずれにもバルバラの名がないことは、ベリー公が親しく崇敬する聖人ではなかったことを示すのと同時に、贈呈や相続により他者から譲渡された物品によって、ベリー公の社交関係の範囲においてもバルバラ崇敬が低調だったとの推定を可能とする。

他方、財産目録中にはジャンの蔵書の記述も見える。注目されるのは、ヴァンサン・ド・ボーヴェ『ミロワール・イストリアル』が3揃いあることで、その一つは「豊富な挿絵が描かれている」旨説明がなされている<sup>88)</sup>。この写本に関しては、以下第4節で取り上げる。

以上の財産目録の内容からは、14世紀末から15世紀前半までのフランス宮廷の王族にとってのバルバラ崇敬の傾向が垣間見える。端的に言えば、バルバラはフランスの宮廷では関心をほと

んど持たれなかった聖人である。同様の傾向は、上記パラグラフ3.3で概観したフランス全土におけるパリの傾向とも一致する。しかし注目すべきなのは、コンスタンティノープルからの贈呈品としてバルバラの聖遺物がもたらされたり、来歴は不明ながら類似した経路によって東ローマから招来されて宮廷財産となったと推測可能な例が都合2件見られることである。まさに例外、特別と形容してよい事実だが、この2例が示すシンボリックな意義は、バルバラと彼女の聖遺物がヴァロワ王族の私的な霊的生活には響かないものであったとしても、当時の東ローマ帝国との関係を念頭に置く時、高い霊的な権威とともにきわめて政治的な色彩をも帯びたものであることが見えてくる。

他方、バルバラ図像に関しては、記述は皆無だということになる。したがって、14世紀から15世紀前半までの図像展開に関して知るところはない。本稿ではさきにフランスの文学とデータベースに整理された動産美術・文化遺産の状況から、15世紀から16世紀にかけてバルバラ崇敬が高まりを見せたことを確認した。貴頭らの財産目録についても、15世紀中葉以降の状況を確認する必要があることは論を俟たない。未刊行を含む資料の調査と分析は、今後行っていく予定である。

## 4. 写本にみるバルバラ崇敬と図像

### 4.1 本節の狙いと研究の手法

では、13世紀から15世紀の宮廷を中心として、バルバラ崇敬は低調であり、その図像は不明だと断言しきれぬだろうか。本節で注目したいのは、冒頭で紹介したヴァンサン・ド・ボーヴェ『スペクルム・イストリアレ(SH)』とともに同時代から大きく普及し、装飾の洗練度を増していく私的祈祷書写本の内容である。まず、主要彩飾写本カタログの記載事項を確認しよう。主要図書館のオンライン・データベースならびに電子版ファクシミリによる個別の写本の精査が望ましいが、物理的な制約から本稿では書籍媒体のカタログを用いて大まかな傾向を提示するものとした。カタログ記載の写本については補助的に所蔵図書館のオンラインデータベースも援用する。

対象カタログは、ルロケ著『フランス国立図書館所蔵の時禱書写本』4巻<sup>89)</sup>、『フランス公立図書館所蔵の聖務日課書写本』5巻<sup>90)</sup>、ハーヴィー・ミラー社より刊行されている『フランス彩飾写本調査叢書』を構成するストーンズ著『ゴシック期フランスの彩飾写本』4巻<sup>91)</sup>ならびにオールス著『16世紀フランスの彩飾写本』2巻<sup>92)</sup>とし、バルバラへの言及の有無を確認する。ルロケの著書は、各写本のテキスト内容、典礼暦の使用式、聖務日課や祈祷文に重点を置くのと同時に、テキストに添えられた挿絵の主題を記載する。ストーンズとオールスの著書は、彩飾を重視し、写本学的な知見、テキスト内容、彩飾の主題、彩飾画家・工房、来歴など彩飾写本カタログの形式を踏襲しながら総合的な情報を記載する。ルロケ、ストーンズ、オールスいずれも、別巻に図版を収録する。



## 4.2 『フランス彩飾写本調査叢書』にみるバルバラ崇敬の様相

まず、出版年がより新しいが、ゴシック期前半とルネサンス期という時代的に区分して編纂されたストーンズとオールスの著書から得られる知見から説明する。1260年から1320年までの写本を対象とするストーンズ著『ゴシック期フランスの彩飾写本』では、バルバラに関する記述は認められなかった。これは、聖務日課書や時禱書等の(パラ)典礼写本において聖人と関連する典礼暦、連禱、聖人請願にバルバラ像を描いた挿絵がなかったことを一義的に意味する<sup>93)</sup>。これに対して、16世紀が対象であるオールスの著書では、収録されている時禱書では、聖人請願に挿絵を伴ったバルバラへの請願が含まれるのが普通となっていることが、バルバラ図像への言及から推定される<sup>94)</sup>。2冊の写本カタログから推察できることは、13世紀後半から14世紀第一四半期までのフランスではバルバラ崇敬がほとんど見られなかったのに対して、16世紀には一般に普及していた、という聖人崇敬の拡がりの状況である。

ストーンズの著書とオールスの著書が対象とする時代の中間の時代、すなわち1320年代から1500年前後はフランス写本彩飾の黄金時代であり、フランスを舞台に大いに発展した時禱書もまた彩飾の洗練の質を高めたばかりか、質が劣るものを含めて量も増大した時代である。ストーンズとオールスの著書が属する『フランス彩飾写本調査叢書』においてこの黄金時代のカタログは現在のところ未刊行である。

## 4.3 ルロケ『フランスの公立図書館所蔵の聖務日課書』にみるバルバラ崇敬の様相

ルロケの著作は、聖務日課書と時禱書という2種の(パラ)典礼書について、フランスの公立図書館(時禱書は現フランス国立図書館に限定)が所蔵する写本を網羅したものである(Leroquis 1934-43)。時禱書では13世紀から18世紀に制作したものが対象となり、情報が古い感みはあるが、上記のストーンズとオールスの著書と補完的に参照することが可能だ。

5巻から構成される『フランスの公立図書館所蔵の聖務日課書』の編集方針は、修道会の会派や司教区によって異なる典礼暦や式文を具体的に分類し、写本の使用式を同定することが出発点となる。同時に、彩飾にも副次的ながら目が配られ、ミニアテュール(挿絵)や図像入りの装飾頭文字等のナラティブな彩飾の主題も同定がなされている。写本の使用式の手がかりとしてのローカルな崇敬を集めた聖人の有無が重要視され、写本の記述では使用式特定の論拠となる聖人が言及される傾向がみられる。バルバラは、上述のように特定の地域においてより崇敬が篤いという傾向を持ちながら、崇敬の高まりでは歴史的に後発であり、特定の使用式との密接な結びつきを持つとは判断されて来なかった、看過されがちな聖人である。ルロケの著書でも、上記のストーンズとオールスの著書と同傾向を見せ、バルバラに言及するのかどうかは厳密な基準があったとは言い難い。しかし、聖務日課書の場合、サンクトラレ所収の聖人については基本的に網羅的に記載されることから、任意の使用式の聖務日課にいつからバルバラの典礼が加わったのかを知ることが可能である。

まず、フランスで制作され、使用された聖務日課書写本の中で最も早くにバルバラの祝日を掲載するものを挙げてゆこう。最古の年代は12世紀末で、サン＝ティエリ修道院の聖務日課書である<sup>95)</sup>。同様にベネディクト会に属するアラスのサン・ヴァー修道院<sup>96)</sup>、サン＝タマン修道院<sup>97)</sup>、マルシエンヌ修道院<sup>98)</sup>、ヴェルダンのサン＝モール修道院<sup>99)</sup>、フェカンのトリニテ修道院<sup>100)</sup>の聖務日課書が挙げられる。他の修道会諸派では、エルサレム神殿修道参事会の聖務日課書<sup>101)</sup>、シト一派聖務日課書<sup>102)</sup>がある。以上は13世紀に制作された写本である。そのほかに、メス使用式聖務日課書<sup>103)</sup>、カンブレ使用式聖務日課書<sup>104)</sup>が13世紀の写本である。これらの事例は、上記第3節で取り上げた動産美術・文化遺産の分布が密なフランス北東部と一致する。これらの地域でベネディクト会使用式の聖務日課書に比較的早くからバルバラの祝日が収録されている事実は、聖女の崇敬の伝播を考える上で手がかりとなりそうである。なお、ここに列挙した13世紀の写本にバルバラ図像はない。

他方、王侯が注文・所有した写本を含むパリで制作された聖務日課書でバルバラが典礼暦、連禱、サンクトラルに登場するのはかなり遅い。オノレ・ダミアンと工房により1285年頃に制作されたと推定される『フィリップ4世美麗王の聖務日課書』にはバルバラの名は一切登場しない<sup>105)</sup>。美麗王が創設した『ポワシー王立女子修道院の聖務日課書』は、14世紀初頭にオノレ・ダミアンの後継者たちによって彩飾され、ドミニコ会とパリ使用式が混合するが<sup>106)</sup>、バルバラへの言及はない。この2点と劣らずジャン・ル・ノワールやジャン・ド・シの聖書の画家（小森の画家）等の筆になる豊富な挿絵によって彩飾された1370年頃制作の『シャルル5世の聖務日課書』では、連禱にバルバラの名が見える<sup>107)</sup>。同様に、来歴が不明だが、14世紀中葉の制作とされるパリ使用式聖務日課書では、連禱に聖女の名がみえる<sup>108)</sup>。総じてパリで使用された聖務日課書では、バルバラの名が明確に表れるには14世紀の後半を俟たねばならない、という傾向が見られると言えよう。

#### 4.4 ルロケ『フランス国立図書館の時禱書』によるバルバラ崇敬の様相

このパラグラフでは、前パラグラフに続いて、ルロケの著書の記述に依拠しながら、時禱書におけるバルバラの記載の有無を通じて聖女の崇敬の伝播を確認する（Leroquis 1927）。さきのパラグラフ4.3で扱った聖務日課書は、基本的には在俗聖堂や修道院等の教会の典礼において使用され、公的・集団的な性質を有していた。比較すれば時禱書は、私的な用途を持つため、より個人的な性格を持つのは周知のとおりである。個人から個人へ相続されたり、家族の生死の記録が暦や余白に記入されたりする慣習から、単独の個人とともに血縁を核とする個人間の紐帯がその内容に反映されていることが特徴だ（Stanton; Reinburg）。したがって、聖務日課書でバルバラ崇敬の拡がり認められないような地域においても、個人の志向によっては所有する時禱書にバルバラが加えられていることが論理上は考え得る。以下にルロケが編集した、フランス国立図書館1館のみが所蔵する時禱書に関する記述を通じて、バルバラ崇敬の一般的な傾向を確認しよう。

ルロケの著書ではっきりとバルバラへの請願が収録されていると記述されるようになるのは、





図 8. 〈聖バルバラ立像〉『時禱書零葉』パリ、15 世紀初頭  
フランス国立美術学校、Mn.mas 64

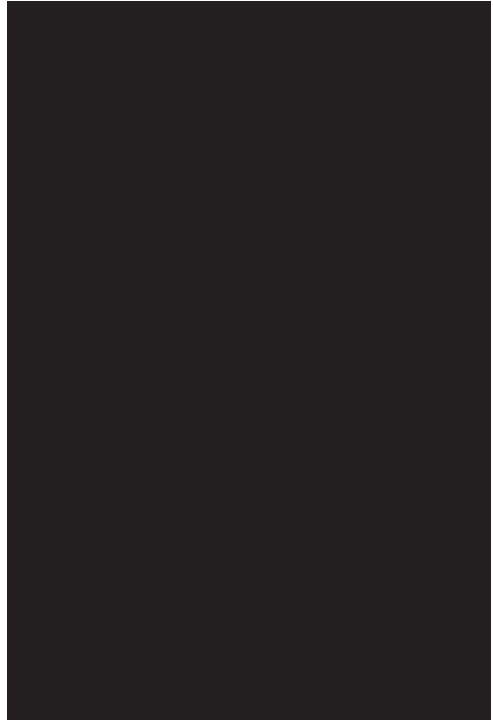


図 9. 〈聖バルバラ立像・バルバラの殉教〉フランス西部、1420 年代  
フランス国立図書館、BnF Lat 1159, f. 166v  
(©Bibliothèque nationale de France)

15 世紀以降に制作された写本からである (図 8)<sup>109)</sup>。その中には、ヴァロワ家の王侯の時禱書で、バルバラへの言及があると指摘されている作例はない。ベリー公ジャンの二つの時禱書、『ベリー公の大時禱書』と『ベリー公の小時禱書』(ともにパリ使用式) の記述でもバルバラの名を見出すことはない。ただし後者は、フランス国立図書館のウェブサイトで公開されている電子ファクシミリ版を確認すると、典礼暦 12 月 4 日にバルバラの祝日の記載が認められる<sup>110)</sup>。同様に、ベリー公の晩年にあたる 1410 年代にランブール兄弟らの未完の代表作『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の典礼暦の 12 月 5 日に、バルバラの名を見出すことができる<sup>111)</sup>。前節で財産目録において確認したとおり、コンスタンティノープルから直接もたらされたバルバラの肋骨の聖遺物を入手したにも関わらず、連禱にすらバルバラの名がないことは、ベリー公が聖女への崇敬をほとんど持っていなかったことを示している。歴代のフランス王を含めたヴァロワ家の男子の時禱書・私的祈禱書写本では総じて同様の傾向が見られるようである<sup>112)</sup>。16 世紀に制作された『アンリ 2 世の時禱書』でも、典礼暦のみにバルバラの名が見える<sup>113)</sup>。15 世紀末以降、バルバラ崇敬が広く普及する潮流になってなお、フランス王家の構成員にとってバルバラへの関心が高くなく、聖女への信仰が王家の伝統とはなっていないことが考えられる。今後対象を広げて写本を精査す

る価値がある問題である。

他方、妃などの姻族も含むヴァロワ家の女性たちの場合は、やや傾向が異なるようである。

上記第2節で取り扱ったフランス語によるバルバラ伝の一つが、ブルボン公ジャン2世妃ジャンヌが所有した写本に散文キリストの受難伝とともに収録されているものである<sup>114)</sup>。蔵書銘や彩飾の紋章からブルボン公妃が所有していたことが知れる時禱書は、もともとはマルグリット・ド・ブルターニュのために制作されたと考えられ、典礼暦の12月5日と連禱にバルバラの名が記される一方 (ff. 12 および 149)、49人の聖人を数える聖人請願にバルバラは含まれていない<sup>115)</sup>。ただ、聖人請願が未完のうちに唐突に写本の巻末に至る印象があることを付記しておく<sup>116)</sup>。

シャルル8世とルイ12世の王妃が所有した『アンヌ・ド・ブルターニュの小さき時禱書』では、典礼暦、連禱 (f. 50) に加えて聖人請願の中にバルバラが加えられている (f. 78-78v)<sup>117)</sup>。ほぼ同時代に制作された、アンヌの最も小さな写本『アンヌ・ド・ブルターニュのいとも小さき時禱書』でも、典礼暦、連禱、請願にバルバラが含まれている<sup>118)</sup>。ジャン・ブルディションを御用彩飾画家として重用した『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』では、典礼暦、連禱 (f. 104v) に、バルバラの名が見える<sup>119)</sup>。

歴代の王妃の所有した私的祈禱書写本が必ずしもバルバラの請願を含まなかったことを考慮すれば、アンヌの写本に聖女の請願が加えられたのには、いくつかの理由が考えられる。一つは、上記のオールズ編集の16世紀の彩飾写本が示すのと同様の傾向として、1500年前後のパリでバルバラ崇敬が定着したと見られることだ。もう一つは、ブルターニュにおけるバルバラ崇敬の伝統との関りである。例えばアンヌの従伯父に当たるブルターニュ公ピエール2世の『ナント使用式時禱書』には、挿絵とともにバルバラ請願が含まれている (図9)<sup>120)</sup>。これに先行し、15世紀前半の代表的な彩飾写本に数えられる、『ロアンの大時禱書』でも同様である<sup>121)</sup>。上記第3節で概観したように、ブルターニュでのバルバラ崇敬の拡がりを聖史劇と動産美術・文化遺産の状況から推察可能である。15世紀末に巡礼聖堂が建立されるのも、ローカルな信仰と深く関わるものだろう。私的祈禱書における傾向は、こうした地元の伝統と矛盾するものではない。なお、綱渡りのような外交努力の末、アンヌとの結婚を果たしたシャルル8世の時禱書にバルバラへの請願が含まれているのは示唆的である<sup>122)</sup>。

#### 4.5 写本彩飾にみるバルバラ図像

私的祈禱書類が写本彩飾ではバルバラ図像が最も頻繁に描かれる媒体と言える。これまで大まかに跡づけてきたとおり、バルバラの請願がフランスで使用された写本に登場するのは15世紀以降である (図8-10, 13)。バルバラはアトリビュートの塔、書物、棕櫚の枝を伴う立像か、少数ながら父の手で斬首される殉教の場面で表現されるのが定型である<sup>123)</sup>。

より古いバルバラ図像の作例は、聖人伝の挿絵に見ることができる。14世紀以前に制作された作例では、『スペクルム・イストリアレ』の俗語訳『ミロワール・イストリアル (MH)』につけられた挿絵が最も早い作例となる。フランス王妃ジャンヌ・ド・ブルゴーニュが長男で後年のジ



図 10. 〈聖バルバラ立像〉パリ、1498 年頃、ジャン・ディーブル  
フランス国立図書館、BnF NAL 3120, f. 152.  
(©Bibliothèque nationale de France)



図 11. 〈聖バルバラの拷問を命ずる判事マルシアヌス〉パプルー様式の画家  
パリ、1330 年代前半、アルスナル図書館、Ars. 5080, f. 238.  
(©Bibliothèque nationale de France)

ジャン 2 世の婚約を機に制作させた写本では、判事マルシアヌスの命で拷問を受けるバルバラの姿が描かれている (図 11)<sup>124)</sup>。同様の挿絵が様式的な特徴から 1350 年代に制作されたと推定可能な、シャルル 5 世のために制作された MH 第 3 巻でも描かれている (図 12)<sup>125)</sup>。父王に倣い、結婚を機に『ミロワール・イストリアル』の一揃いを整えたと想像することもできよう。1420 年のブルゴーニュ公ジャン無畏の財産目録に記載が見られるこの写本は、シャルル 5 世の死後、まずは弟のベリー公ジャンに渡った。ついで 1413 年にベリー公が甥のジャン無畏公に譲渡したと考えられている<sup>126)</sup>。その後は、父無畏公の暗殺後蔵書も相続したフィリップ善良公のコレクションに加わり、善良公の死の直後、1469 年頃以降の来歴が不明とされている。したがって、善良公を含めて、14 世紀中葉から 15 世紀中葉までのヴァロワ家の王族 3 代は、同一のバルバラ伝テキストに触れていたことになる。

世界史または世界年代記の編纂は、最高権力者にのみ許された特権である。だからラテン語版について俗語訳版にバルバラの聖人伝が伝えられてきた意義は決して小さいものではない。しかし、MH 全体から見れば、バルバラ伝の比重はごく小さい。ジャン 2 世の MH の挿絵が、バルバラ図像の早い時期のものに特徴的な洗練の欠如を呈するのは理解できるとして、後継者シャルル 5 世の一揃いでは、文字どおり模写したかのような図様が印象的である。父王の蔵書の忠実な副本をシャルル 5 世が所望したとも解釈できるだろうが、それ以上に、美貌の聖女を想像力豊かに視覚化しようとする動機が一切感じられないことの方に、バルバラと彼女の伝記に対する身分の高い読者たちの期待値の反映がうかがえるような気がしてならない。



図 12. 〈聖バルバラの拷問を命ずる判事マルシアヌス〉  
パリ、1350年代後半、フランス国立図書館、BnF  
NAL 14591, f. 69v.  
(©Bibliothèque nationale de France)

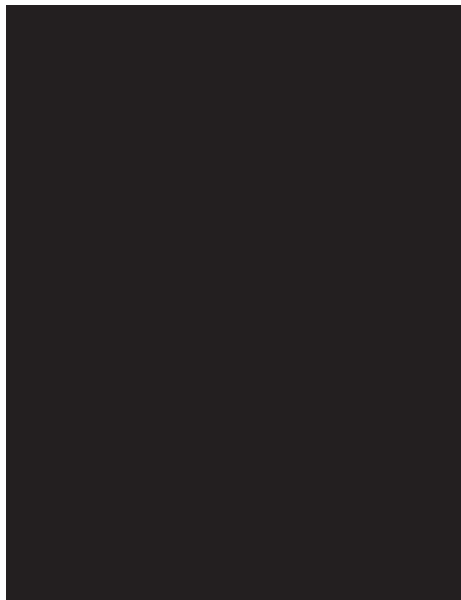


図 13. 〈聖バルバラの殉教〉ピシヨール様式  
の画家  
16世紀初頭、フランス国立図書館、  
BnF Lat. 923, f. 96.  
(©Bibliothèque nationale de France)

MHを典拠の一つとすると推定可能なクリスティーヌ・ド・ピザン著『貴婦人の都』は、著者が庇護者たちに献呈したものを中心として多数の挿絵を含む写本が現存する。挿絵が描出するのは、華麗な衣装に身を包む、古代の歴史、神話、文学に取材した女傑たちである。他方、中世に信仰を集めた聖人たちが挿絵の主題に選択されることが稀であり、バルバラの挿絵は皆無である。クリスティーヌの著述活動から推測され得るのは、イタリア人としてフランスの宮廷に仕える彼女がイタリア風の人文主義的な主題を自著において戦略的に展開してきたこととの関連である。クリスティーヌがMHを利用したと仮定すれば、そこに描かれていた、裸身をさらしつつ勇敢に拷問を克服するバルバラの図像を見知っていた可能性もあるだろう(図11, 12)。想像をたくましくすれば、女性擁護という意図をもって著された『貴婦人の都』には、拷問される女性の図像は不適切だと判断されたとも考えられる。能動的に活動する女傑を描くナラティブな新図像への要求がむしろ高まっていたと想定してもよい。いずれにせよ、現状としては15世紀初頭までのフランスの写本彩飾では、バルバラ図像として見るべきものは確認できない、という事実をここであらためて確認しておきたい。

## 5. 中世フランスにおけるバルバラ崇敬と図像：総括と展望

聖バルバラ伝がフランス語で書かれるのは13世紀後半、聖史劇の脚本が書かれ、上演されるのは15世紀だった。だから文学研究者たちが異口同音に述べるとおり、バルバラは中世末期にきわめて高い人気を誇った、というのは誤りではない。しかし、データベースとカタログを利用して大まかに聖女に関わる多様な文化遺産を跡づけてみると、既に知られていること—フランスの北東部にバルバラの祭日を掲載する写本の分布が偏っていること、ノルマンディーに聖遺物が伝わること—がより詳細に確認されるのと同時に、これまで注目されてこなかったディテールが明らかになってきた。

フランスにおけるバルバラ崇敬はノルマンディーにおいて11世紀に始まった。13世紀を通じてフランス東北部のベネディクト会修道院を中心として聖女の祭礼が司式されたと見られる。他方、フランス王家においてバルバラ崇敬の端緒が開くのは、ルイ9世聖王の時代、13世紀半ばである。ヴァンサン・ド・ボーヴェ著『スペクulum・イストリアレ』に聖女伝が加えられた。聖女の図像の登場は、14世紀に入ってからのもので、聖女に加えられた凄惨な拷問の一つが描かれた。14世紀末から15世紀初頭にかけて、コンスタンティノープルから聖遺物がフランス宮廷にもたらされたバルバラに関しては、ある種学術的とでもいうべき冷淡な態度がフランス宮廷で共有されていたと言える。靈的な敬愛を差し向ける対象でも、その美貌を視覚化して信仰のよすがとする動機も生み出さなかった聖人にとどまっていた。

15世紀後半から末に至ってようやく請願の祈祷文とともに、定型的な図像が貴顕の私的祈祷書写本や、フランスの東北部半分の諸地域の教区聖堂などに広まっていく。同時に文学という言葉説の中で、バルバラの物語がフランス語話者の間で愛好される。

以上が、本稿を通じて露わになってきた宮廷を含むフランスでのバルバラ崇敬の全体像の輪郭である。

前稿で分析したように、ミュンヘンにある『フィリップ善良公のいと小さき祈祷書』所収のバルバラ像は、襟、袖口、ベルトで細く締めたウェストが特徴的な華やかなモードのドレスを着、背後に広がる遠景はブシコー様式やベッドフォード様式をほうふつとさせ、どこか復古調のパリの様式である(図1)。しかし、本稿を念頭に置いてこの挿絵を見直してみると、1450年前後のパリはようやくバルバラに対する関心が高まってきた時期に当たり、このような魅力的なバルバラ像を描く機運が訪れていたのかどうかは疑わしい状況だった筈で、パリ調は言ってみればまやかしだと知れる。

本稿は、フランスにおけるバルバラ崇敬と図像研究の出発点と位置づけたい。より詳細な分析と考察が必須のこの領域はまた、本稿の後編に当たるネーデルラント、特にブルゴーニュ宮廷におけるバルバラ崇敬を考察するための前史とも比較対象とも位置づけている。後編での比較の視点を加えた考察を通じて、フィリップ善良公と彼の時代のバルバラ崇敬と図像について、またフランスにおける状況について新たな視点から、複眼的な理解が可能となるのではないかと考えて

いる。

(この研究は、JSPS 科研費 JP19K00200 によるものです。)

## 註

- 1) 12月4日にかわってバルバラの祝日を12月5日とする例については、以下第4節参照。
- 2) SHの執筆時期については、Voorbij 1991, 16-22。
- 3) 写本番号 clm 2662、ff166v-1677。SHの文献学上の分類では最もオリジナルに近いとされる13世紀後半制作と推定されるディジョン写本 Ha の系列に連なり、Ha10の符号を持ち、1324年頃の制作。Clm 2662の写本学・文献学的な知見については下記のウェブサイトおよび Voorbij 1991 参照。なお、SH収録の聖バルバラ伝は、15世紀後半以降の各種刊本に収録されたテキストも clm 2662 写本収録テキストとほぼ同一とみられる。刊本 SH については、フォールベイトとアルブレヒトが編集人を務める文献学的なウェブサイト “A Vincent de Beauvais Website” 中 ‘Editions before 1700’ のページの書誌情報と電子ファクシミリ版へのリンクを参照。[<http://www.vincentiusbelvacensis.eu/bibl/ed2.html>] (アクセス 2021/10/14)
- 4) BHL, 1: 142-146 に整理されたラテン語聖バルバラ伝のいずれとも SH 収録の聖女伝の内容は完全に一致しないばかりではなく、SH では、ディオスクロスの長い出張や塔の窓数のエピソード等を省略しているためにかなり短い。ヴァンサン・ド・ボーヴェはスペクルム・マイユス執筆に当たってはパリならびにイル＝ド＝フランス地方の書籍を渉猟したと伝えられる。失われたバージョンを使用した可能性に加えて、BHL に収録されたバルバラ伝と同一のテキストを短く編集した可能性も捨てきれない。詳細なテキスト比較は今後の課題である。
- 5) Vauchez 1986, 27-56; Fleith 1991。
- 6) 15世紀後半以降のバルバラ崇敬については、第3・4節参照。
- 7) 『黄金伝説』に当初から聖バルバラが収録されているとの誤解は、以下の論文にも認められる。Lockwood 1953; Williams 1975; Weed 2002 等。
- 8) ルイ9世との交流は、“A Vincent de Beauvais Website” (註3参照) 中、‘Biography’ および ‘Bibliography’ 参照。また、Lusignan 1992 参照。
- 9) Paumier-Foucart, Lusignan & Nadeau 1990, Chavannes-Mazel 1988。
- 10) 『黄金伝説』にバルバラが含まれていない理由として、ヤコブス・ダ・ウォラギネが執筆の着想源としたドミニコ会士ジャン・ド・マイイ著『諸聖人の事績と奇跡抄録 (Abbreviatio in gestis et miraculis sanctorum)』(1240年頃編纂) にバルバラが含まれていないことが指摘できよう。ジャン・ド・マイイと上記著書については、Maggioni 2013 参照。
- 11) 善良公が相続した典礼・私的祈祷書類写本は、祖父由来の『フィリップ豪胆公の大時禱書』(フィッツウィリアム美術館 ms. 3-1954)、『フィリップ豪胆公の祈祷書』(ベルギー王立図書館 KBR ms. 10392)、左記大時禱書から分冊されたと推定される『フィリップ豪胆公の祈祷書』(同 KBR ms. 11035-37)、『フィリップ豪胆公の小判祈祷書』(同 KBR ms. 110)、父由来の『パリ、サント＝シャペル使用式ミサ典書』(同 KBR ms. 9125)。
- 12) 『フィリップ豪胆公の大時禱書』への善良公による改編については、体系的な研究が待たれる状況である。



- 13) Nemitz & Thiers 1996, Nemitz 2009 がドイツ、van Dijk 2012 がネーデルラント、またベルギーに隣接するフランス北東部については Baligand & Carpentier-Bogaert 1997 の先行研究がある。中世末期のドイツとネーデルラントで流行する童貞聖女に囲まれた聖母 *Virgo inter virgines* 図像の成立と展開について、バルバラを含む四大童貞聖女や救難 14 聖人崇敬と図像とも関連付けながら、ケルン大司教管区を伝播の範囲として注目した論考に Weed 2002 がある。また、Bakhuys & Coudert 2011 参照。
- 14) フランス語の “*patrimoine mobilier*” を便宜上このように和訳する。
- 15) 近世以降の石炭等の鉱山労働者を中心とするフランス北部地方のバルバラ崇敬に関しては、Baligand & Carpentier-Bogaert 1997 参照。同様のドイツにおける民衆的なバルバラ崇敬と美術については、以下註 18 掲載の文献を参照。
- 16) Denomy 1939; de Gaiffier 1959; Williams 1975; Wolf 2000, 1-40; van Dijk 2012, 27-36.
- 17) Denomy 1939; Williams 1975, 156, n. 2-3; Wolf 2000, 3-11. 左記の諸文献では、西方におけるバルバラ崇敬の最古の証拠としてカールスルーエ、バーデン州立図書館所蔵 Codex Aug. perg. 32 を挙げている。この写本は、9 世紀にライヒェナウで制作された『聖人受難伝 (Passionale sanctorum)』である。同写本の電子版ファクシミリは、上記図書館ウェブサイトで閲覧可能であり、バルバラの受難伝は、ff. 30v-31v に収録されている。[UNR: urn:nbn:de:bsz:31-65346] 参照。また、図写本のカタログは、Holder 1970, 119-131 および同カタログ電子版を参照。[https://digital.blb-karlsruhe.de/blbihd/content/pageview/83431] (以上、アクセス 2021/10/17)
- 18) Nemitz & Thierse 1996, Nemitz 2009 参照。
- 19) 詳細は次稿で論じる予定である。
- 20) 詳細は第 2・3 節を参照。
- 21) Wolf 2000 参照。
- 22) Phillips 2004.
- 23) カタリナやアグネスがローマ使用式の典礼暦に記載があることは、早くから崇敬が確立していた証拠である。他方、バルバラは典礼暦の記載にも局所性が認められる。フランスとネーデルラントの祈祷書写本の典礼暦の記載に関しては、以下、第 3 節および次稿に実例を紹介する。
- 24) BHL *Acta Sanctorum* (1643-1940). 当然ながらブリュッセルのボランディスト協会には聖バルバラの聖人伝に関する諸資料を図書館に保管している。同資料は、未調査である。また、バルバラの聖人伝の刊行物については、本稿の参考文献 (一次資料) も参照されたい。
- 25) ベルギー王立図書館デジタルライブラリー Belgica 上の Bollandistes に含まれ、現時点で電子ファクシミリ版資料には、10 月 17 日から 12 月 3 日までの日付を有する資料を含む 82 点の写本・草稿である。Belgica の URL は以下のとおりである。[https://belgica.kbr.be/belgica/] (2021/10/14 アクセス)。
- 26) Dreve, Blume & Bannister (1886-1922).
- 27) Rézeau (1983) 参照。
- 28) ベルギー王立図書館 KBR 10295-304, ff. 59-63v 掲載の 8 音節詩行『聖バルバラ伝』については、Meyer 1901, Denomy 1939, Williams 1975 参照。
- 29) アヴィニオン市立図書館 ms. 615, ff. 96-109v 掲載の 12 音節 4 行詩『聖バルバラ伝』については、Meyer 1901, Williams 1975、また 1992 年以前の参考文献は Robert & Labie-Leurquin 1992, 1353 参照。なお、フランス国立テキスト史研究院 (IRHT) ウェブサイト Jonas では、この韻文バルバラ伝の成立年代をウィリアムズより早い 15 世紀としている。Jonas 内アヴィニオン市

- 立図書館 ms. 615 に関するパーマネントリンク [<http://jonas.irht.cnrs.fr/manuscrit/5257>] 参照 (2021/10/30 アクセス)。また、フランス中世文学のウェブサイト Arlima 中、聖バルバラ伝の項目参照 (執筆者 Mario Longtin & Laurent Brun、最終更新日 2017/9/10)。[<https://arlima.net/no/2443>] (2021/10/24 アクセス)
- 30) Meyer 1901 および Denomy 1939 が古い言及である。フランス国立図 BnF NAL 615, f. 124 に記載される 10 音節 6 詩行 21 連形式の聖バルバラ伝は、俗語祈祷文として編まれている。Robert & Labie-Leurquin 1992, 1353 および Rézeau 1983, 85。この写本は、オータン使用式の祈祷書である (Wolf 2000, 31)。フランス国立図書館写本部門のウェブサイト Archives et manuscrits の該当写本カタログの頁において、その来歴を、祈祷書巻頭・巻末に記載された旧所有者であるディジョン在所ヴァンデネス (Vandenesse) およびモレ (Molet) 家による家族の生歿記録 (1494-1559) から示唆している。同カタログのパーマネントリンクは、[<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc71324w>] 参照 (2021/10/30 アクセス)。祈祷書の使用式と所有者の所在地との間には矛盾はないが、当初の所有者なのかどうかは不明である。
- 31) Denomy 1939, 176-177 および Wolf 2000, 31 参照。フランス国立図書館 BnF Fr. 24865。同写本の詳細な内容の一覧、来歴については BnF の以下のウェブサイトの頁を参照：[<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc534244>] (2021/10/30 アクセス)。
- 32) Denomy 1939, 177-78 および Wolf 2000, 31 参照。昼間聖務日課書、フランス国立図書館 BnF Lat. 1321。フランス国立図書館のオンライン・カタログ Archives et manuscrits では、同写本がリモージュ、サン＝マルシアル修道院で写字された、パリ使用式の昼間聖務日課書として記載されている。[<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc592725>] 参照 (2021/10/30 アクセス)。
- 33) 管見では、MH 所収のバルバラ伝に関する先行研究はない。
- 34) クリスティーヌ・ド・ピザンについては、ムツァレツリ 2010 参照。『貴婦人の都』La Cité des Dames テキスト校訂は、イタリア語対訳版 Richards & Caraffi 2001 参照。フランス語の現代語訳は Hicks & Moreau 1986 参照。また、現存する『貴婦人の都』の中世写本および主要研究論文の一覧は、Delale 2021, 740-764 および中世文学アーカイブのウェブサイト ARLIMA の“Christine de Pizan”の項、no. 28 参照。[パーマネントリンク：<https://arlima.net/no/2>] (アクセス：2022/01/13)
- 35) フランス国立図書館 BnF Fr 975, ff. 1-25 収録の散文詩に関しては、Williams 1975, 158, Jeannot 2012, 303 および Contamine & Tesnières 2013 参照。また、本稿第 4 節でも言及する。
- 36) 5 日間上演される聖史劇『5 日間上演の聖バルバラ劇 (Le mystère de sainte Barbe en cinq journées)』に関する先行研究については、Longtin 2003 および Lemaire 2009 参照。また、ウェブサイト Arlima (中世文学アーカイブ) 中、聖バルバラ劇の項目で、2 日間、3 日間、5 日間、断片を含む原本写本および文献学的研究と校訂版の一覧を参照 (執筆者 Longtin、最終更新日 2015)。[<https://arlima.net/no/223>] (2021/10/24 アクセス)
- 37) 以上、Lalou 1992, 1352-53 参照。また、1990 年代末以降刊行の同戯曲の校訂および研究については、ウェブサイト Arlima 中、バルバラ聖史劇のページを参照。[[https://www.arlima.net/mp/mystere\\_de\\_sainte\\_barbe.html](https://www.arlima.net/mp/mystere_de_sainte_barbe.html)] (2010/10/30 アクセス)。戯曲を収録する最古の写本は、フランス国立図書館 BnF Fr. 976 である。同図書館オンライン・カタログ Archives et manuscrits より以下のページ参照 [https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc51237f] (2010/10/30 アクセス)。また、同戯曲の刊行を含む近年の動向については、Lemaire 2009 参照。

- 38) Lalou 1992, 1353 参照。16 世紀にパリ (3 版)、リヨン (3 版または 4 版)、トロワとルーアン (各 1 版) で刊行された同戯曲の一覧は、上記註 36 に掲載した Arlima のウェブページおよび Rannalls 1999, 151-158 参照。
- 39) Lalou 1992; Lemaire 2009, 500-501 および n. 7 参照。
- 40) *Mystère de sainte Barbe* (1885) に、フランス語訳を附録としてブルトン語版の聖史劇が収録されている。電子版のパーマリンクは以下のとおりである: [<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k736792>] (2021/02/11 アクセス)。
- 41) ネーデルラントの状況については、次稿において扱う予定である。
- 42) BHL 913 では、殉教地をニコメディアとする。
- 43) パリ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館が所蔵する『サント＝バルブ＝アン＝オージュ修道院年代記』(ms. 1643, 14 世紀) に依拠する論考 Ansellem 1999 参照。左の年代記は、1906 年に刊行されている。Sauvage 1906 参照。
- 44) ノルマンディー地方では、13 世紀から 15 世紀までの間に 150 を超す聖バルバラ同信会があったことが確認されるという。Vincent, 1984 参照 (以上、Longtin 2003, note 1 より引用)。また、フランス文化庁動産美術・文化遺産データベース Palissy を参照したノルマンディー地域圏に現存するバルバラ図像の分布については、以下、3.3 節参照。
- 45) ブルターニュ地域圏モルビアン県ル・ファウエット町司祭館所蔵聖バルバラ・聖フィアクリウス聖遺物容器 (15 世紀後半、Palissy 登録番号 PM56001807)。
- 46) 同聖堂に関する先行研究は少ない。Bonnet & Rioult 2010 参照。
- 47) 以下、12 頁参照。
- 48) クエリを “sainte Barbe” とするデータベース Mérimée のパーマネントリンクは、 [<https://www.pop.culture.gouv.fr/gallery/61767a321e37350e2c9bb682>] を参照 (2021/10/25 アクセス)。なお、各地の聖堂内のバルバラに奉獻されたチャペル (通常 Chapelle Sainte-Barbe という呼称を持つ) については、系統的なデータが未確認のため、本稿では除外した。
- 49) フランス文化省が管理する国有美術品のデータベース Joconde において、クエリを “sainte Barbe” としたパーマネントリンクは [<https://www.pop.culture.gouv.fr/gallery/617679367044b20e2a2aca67>] である (2021/10/25 アクセス)。
- 50) 絞り込み検索後のデータベース Joconde のパーマリンクは以下のとおりである。 [<https://www.pop.culture.gouv.fr/gallery/617799f3553b260e1421c7ab>] (2021/10/26 アクセス)
- 51) “sainte Barbe” をクエリとするデータベース Palissy のパーマネントリンクは、 [<https://www.pop.culture.gouv.fr/gallery/61768260e8e0080e26e94896>] 参照 (2021/10/25 アクセス)。
- 52) 1600 年以前に絞り込み検索のパーマネントリンクは、 [<https://www.pop.culture.gouv.fr/gallery/617684c97044b20e2a2aca8d>] 参照 (2021/10/25 アクセス)。
- 53) データベースでは、多翼式祭壇画のように、全体を 1 件、構成要素各々を 1 件として登録するほか、文化財を管轄する複数の部署が各々登録を行うケースもある。明らかに重複するものは除外したが、件数の多さから重複のチェックは十分に行われていない。このため、1 の位を四捨五入した概数を本稿では提示している。
- 54) 97 件の動産美術・文化遺産が確認された。
- 55) 45 件。
- 56) 88 件。
- 57) 37 件。

- 58) 37件。
- 59) 28件。
- 60) データベース上のメタデータに準拠した、制作年代ごとの件数の概算の割合は以下のとおりである。16世紀：77.8%、15世紀：21.2%、14世紀：0.8%、13世紀：0.2%。
- 61) Palissy では、オルヌ県、コンデ＝シュル＝サルト市、サン＝マルタン教区聖堂、窓2、15-16世紀（データベース番号 IM61004060）；カルヴァドス県、オルベック市、ノートルダム教区聖堂、窓5、15世紀第4四半期（データベース番号 IM14005277）；コート＝ドール県、スミュール＝アン＝オクソワ市、ノートルダム参事会聖堂、窓29、16世紀前半（データベース番号 PM21002213）；モルビアン県、ノワイヤル＝ポンティヴィ市、サント＝バルブ＝ド＝プルヴラン礼拝堂、内陣窓、16世紀（データベース番号 PM56000709）など。
- 62) Palissy に登録された作例に、オー＝ラン県リュームスヴィレール村聖クリストフォロス教区聖堂《木彫三連祭壇衝立》15世紀末/16世紀初頭（データベース番号 IM68011071）がある。
- 63) さしあたって刊本が出版されている以下の14世紀以降の財産目録に拠った。Labarte 1879; Guiffrey 1887; Moranvillé. また、Proctor-Tiffany 2019.
- 64) 各財産目録では、男性聖人への言及が聖女よりはるかに多い。紙幅制限と本稿の主旨からは外れるため、基本的に男性聖人への言及は行わない。
- 65) 編者による原題は『アンジュールルイ1世の金銀細工ならびに宝飾品目録（Inventaire de l'orfèvrerie et des bijoux de Louis I, duc d'Anjou）』。オリジナルの15余行にわたる題目の要約である。Moranvillé 1903-1906, 1.
- 66) Moranvillé, inv.nos. 1（マгдаラのマリアと対）、297（マルガリータと対）、303、312、314、317、320、347、387、645.
- 67) Moranvillé, inv.nos. 1, 297.
- 68) Moranvillé, inv.nos. 1, 308.
- 69) Moranvillé, inv.nos. 6, 303, 317.
- 70) 目録における記載は Moranvillé, inv.nos. 1, 181, 297, 298, 303, 308, 314, 317, 320, 347, 387 参照。
- 71) Moranvillé, inv.nos. 459, 467.
- 72) Moranvillé, inv.nos. 460, 470.
- 73) Moranvillé, inv.nos. 461, 465.
- 74) Moranvillé, inv.nos. 462, 469.
- 75) Moranvillé, inv.nos. 463, 464, 468.
- 76) Moranvillé, inv.nos. 3503, 3504.
- 77) Moranvillé, inv.no. 3577. 同鏡面一対は、ルーヴル美術館のウェブサイトより、以下の収蔵品データベースのページを参照。[<https://collections.louvre.fr/en/ark:/53355/cl010096780#>], [<https://collections.louvre.fr/en/ark:/53355/cl010109928>]（2021/11/1 アクセス）
- 78) Moranvillé, inv.no. 401.
- 79) Moranvillé, inv.no. 402.
- 80) 例として、Labarte inv.no. 953 では、「一、水晶製の聖遺物容器、鍍金銀製の箱のような形状、縁飾り。評価額3オンス10スターリング」また、inv.no. 1038 では聖職者の礼服の記述として「一、高位聖職者のカズラ、金地にプチポワン刺繍で人物像。シャロン司教ニコル・ド・ヴェール殿より陛下へ贈呈。」など、聖遺物容器に納められている遺物の聖人や描かれている人物像の

- 記述は省略されている。
- 81) Guiffrey t. 1, inv.no. 123.
- 82) Guiffrey t. 1, inv.nos. 122, 123. また、1416年にベリー公の遺言執行者らの手によって作成された死後財産目録に、東ローマ皇帝パライオロゴス・マヌエル2世からベリー公に贈呈された毛織物製の動植物文様で装飾された天蓋飾り布が記載されている。Guiffrey t. 2, inv.no. 791 参照。西方の援軍を引き出す外交努力として同皇帝が1余年にわたりパリに滞在したことを含む、フランス王家と東ローマとの最終的には不首尾に終わった軍事協力がギリシャ風の宝物の存在の背景にあることは確かだろう。今後詳細に考察したい。
- 83) Guiffrey t. 2, inv.nos. 910-915.
- 84) 例えば、フィレンツェ式の刺繍を施した祭壇飾り布には、主場面である聖母の戴冠を囲む側面には、カタリナとステファノの他、グレゴリウス、ニコラウスが表されている。Guiffrey t. 2, inv.no. 1298 参照。あるいは同じくフィレンツェ式の祭壇前飾りでは、使徒たち、ヒエロニムス、ラウレンティウス、ニコラウス、ステファノ、マグダラのマリア、カタリナが周囲に表されている。前掲書、inv.no. 1299.
- 85) 具体的には、Guiffrey t. 1, inv.no. および Guiffrey t. 2, inv.no. 1317「祭壇のための大判の豪華なフィレンツェ刺繍布、中心に聖母の戴冠、左右には使徒たち、殉教者たち、長老たち、処女たち〔後略〕」とある。
- 86) Guiffrey t. 2, inv.no. 1317.
- 87) Guiffrey t. 2, 166, n. (1) 参照。
- 88) Guiffrey t. 2, inv.no. 943 および 960. 豊富な挿絵は 943 番記載の 1 揃いに記述がある。
- 89) Leroquais 1927. 収録写本の制作年代は、12 世紀から 18 世紀である。
- 90) Leroquais 1934. 収録写本の制作年代は、9 世紀から 18 世紀である。
- 91) Stones 2013-2015. 収録写本の制作年代は、書名が示すとおり、1260 年から 1320 年である。
- 92) Orth 2016. 収録写本の制作年代は、書名のとおり 16 世紀である。
- 93) 図像、装飾や色インク等による強調を伴わない典礼暦や連禱にバルバラの名が記載されている可能性は、Stones 2013-2015 収録写本について、インターネット上の電子ファクシミリ版を含む写本自体の閲覧によって確認すべき課題である。同様に、カタログ記載外の項目については、Leroquais 1927, 1934 および Orth 2016 も左記の課題を共有する。
- 94) 実例としては、Orth 2016, Vol. 2, cat.nos. 12, 16, 27, 41, 43-45, 47, 51-53, 72, 99 参照。
- 95) ランス市立図書館、ms. 312 (C. 193)。Leroquais *Bréviaires* t. 4, 55-57, cat.no. 731 参照。サンクトラルに式文がなく、連禱に名が挙がっている例として、ジュミエージュ修道院聖務日課書、ルーアン市立図書館、ms. 211 (A. 145) がある。Leroquais *Bréviaires* t. 4, 104-106, cat.no. 755 参照。
- 96) アラス市立図書館、mss. 465 (893), 991 (330)。Leroquais *Bréviaires* t. 1, 53-54, cat.no. 30 および 71-72, cat.no. 45 参照。
- 97) ドゥエ市立図書館、ms. 153、Leroquais *Bréviaires* t. 2, 60-62, cat.no. 241 参照。
- 98) ドゥエ市立図書館、mss. 137, 138, 142。Leroquais *Bréviaires* t. 2, 48-49, cat.no. 233 ; 49-50, cat.no. 234; 52-53 cat.no. 237 参照。
- 99) ヴェルダン市立図書館、ms. 116。Leroquais *Bréviaires* t. 4, 318-321, cat.no. 902 参照。
- 100) ルーアン市立図書館、ms. 205 (Y. 46)。Leroquais *Bréviaires* t. 4, 94-96, cat.no. 750 参照。
- 101) Ordre des chanoines du Temple de Jérusalem. フランス国立図書館、BnF Lat. 10478, Leroquais



- Bréviaires* t. 3, 189-192, cat.no. 594 参照。
- 102) フランス国立図書館、BnF NAL 605、13世紀第1四半期、1218から1224年の間制作と推定可能。ただし、バルバラの祝日はサンクトラルの欄外に追加されたとあり、精査が必要である。Leroquais *Bréviaires* t. 3, 395-396, cat.no. 662 参照。
- 103) メス市立図書館、mss. 461, 462。Leroquais *Bréviaires* t. 2, 231-235, cat.nos. 349, 350 参照。
- 104) カンブレ市立メディアテーク、mss. 33-35 および 93(94)。Leroquais *Bréviaires* t. 1, 167-171, cat.no. 108 および 183-185, cat.no. 114 参照。
- 105) フランス国立図書館、BnF Lat. 1023。Leroquais *Bréviaires* t. 2, 465-475 および同図書館のきわめて詳細なオンライン写本カタログ Archives et manuscrits の以下のリンクを参照。[<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc785335>] また、この写本は、モノクロのマイクロフィルム複製がオンラインで公開されている。[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90665543?rk=128756;0>] (以上、2021/11/07 アクセス)
- 106) フランス国立図書館、BnF NAL 3225。2017年に同図書館に収蔵されたこの写本については、オンラインカタログ Archives et manuscrits の以下のリンク参照：[<https://archivesetmanuscrits.bnf.fr/ark:/12148/cc1031017>] また、写本の電子ファクシミリは、以下のリンク参照：[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10542305b>] (以上、2021/11/07 アクセス)
- 107) フランス国立図書館、BnF Lat 1052, f. 281。Leroquais *Bréviaires* t. 3, cat.no. 511 にはバルバラへの言及はない。この写本の電子ファクシミリ版は、以下のリンク参照：[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84525491>]
- 108) パリ、マザリーヌ図書館、ms. 342(774)。Leroquais *Bréviaires* t. 2, 361-363, cat.no. 417 参照。
- 109) ルロケで14世紀末と記載されているのはBnF Lat. 93である。15世紀制作とされるのは、パリ使用式またはパリで使用されたことが明らかな写本では、BnF Lat. 1382, 9471, 9472, 13262, 13294, 13299, 18017, 18031 が挙げられる。
- 110) フランス国立図書館、BnF Lat. 18014, f. 12v 参照。また、電子ファクシミリ版は、以下のリンク参照：[<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8449684q>]
- 111) 『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』コンデ美術館、ms. 65, f. 13。同頁の彩飾は未完で、暦冒頭の彩飾イニシャル“KL”は後補である。暦の記載事項は、書体の統一性から彩飾に先立って筆写が完了していたと判断できる。バルバラの祝日を1日遅らせて12月5日とする根拠は、特に貴頭が所有した豪華な私的祈禱書写本の場合では、典礼暦を祝日で充填して装飾的な視覚効果のみを重視するおよそ敬虔とは言い難い傾向からも説明可能である。他方、本稿冒頭で引用したように、ヴァンサン・ド・ボーヴェ著『スペクルム・イストリアレ』ではバルバラの祝日を5日と述べている。ベリー公がSHの俗語訳MHを3揃い所有していたことから、典礼暦の作成者がSHを根拠とした可能性はゼロとは言えない。
- 112) ただし、1500年頃ジャン・プイエが彩飾した『シャルル8世の時禱書』モーガン・ライブラリ & ミュージアム、ms.H. 8 では、連禱 (f. 122) や請願 (ff. 190v-191) にバルバラが含まれている。挿絵の図像は、聖女の殉教を表す。同写本のオンラインカタログは、以下のリンク参照：[<https://www.themorgan.org/collection/Hours-of-Henry-VIII/thumbs>] (2021/11/06 アクセス)
- 113) フランス国立図書館、BnF Lat 1429, f. 82v。Leroquais 1927, t. 1, cat. 139 参照。
- 114) 上記註34参照。ジャンヌの生涯については、Contamine & Tesnière 2013 が詳しい。
- 115) Contamine & Tesnière, 33, n. 127。『ジャンヌ・ド・ブルボンの時禱書』フランス国立図書館、BnF NAL 3244 は、2011年に同図書館に収蔵された。同図書館オンラインカタログ：[<https://>



- archivesetmanuscris.bnf.fr/ark:/12148/cc95342k] および電子ファクシミリ版: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8571085n] 参照。(2021/11/07 アクセス)
- 116) 根拠として、個々の殉教聖人や証聖者の最後に殉教聖人または証聖者共同の請願が収録されているのに対して、殉教聖女7人に続くはずの殉教聖女共同請願がないことなどが挙げられる。
- 117) 『アンヌ・ド・ブルターニュの小さき時禱書』は、フランス国立図書館、BnF NAL 3027。オンラインカタログは以下のリンク参照: [https://archivesetmanuscris.bnf.fr/ark:/12148/cc70901n] また、電子ファクシミリ版は以下のリンク参照: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84328965] (以上、2021/11/08 アクセス)
- 118) フランス国立図書館、BnF NAL 3120。オンラインカタログは以下のリンクを参照: [https://archivesetmanuscris.bnf.fr/ark:/12148/cc386562] また電子ファクシミリ版は以下のリンクを参照: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10515740c] (2021/11/08 アクセス)
- 119) 『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』は、フランス公立図書館、BnF Lat 9474。Leroquais 1927, t. 1, cat.no. 144 参照。オンラインカタログは以下のリンクを参照: [https://archivesetmanuscris.bnf.fr/ark:/12148/cc774972] また、電子ファクシミリ版は以下のリンク参照: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52500984v]
- 120) フランス国立図書館、BnF Lat 1159, f. 166v。この写本については、以下のリンク参照: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b55013872v] (2021/11/08 アクセス)
- 121) フランス国立図書館、BnF Lat 9471。Leroquais 1927, t. 1, cat.no. 141.
- 122) 上記註 112 参照。また、モーガン・ライブラリが所蔵するアンヌの一人娘が所有した『クロード・ド・フランスの祈祷集』(M. 1166, ff. 44v-45) にも、バルバラへの請願とともに16世紀初頭のトロンブレイユ的な構図によってバルバラ図像が見開きに展開されている。該当する頁のオンラインリンクは、以下を参照: [https://www.themorgan.org/collection/Prayer-Book-of-Claude-de-France/45] (2021/11/08 アクセス)
- 123) 今後の調査によって、フランスついでネーデルラントの写本彩飾におけるバルバラの図像類型を精査・整理することにした。本稿では、大まかな傾向を提示するにとどめる。
- 124) ジャンヌ・ド・ブルゴーニュが注文した『ミロワール・イストリアル』とその彩色については、Chavannes-Mazel 1988 参照。
- 125) フランス国立図書館、BnF NAF 15491, f. 96v。この写本については、オンラインカタログの以下のリンク参照: [https://archivesetmanuscris.bnf.fr/ark:/12148/cc785246] また、オンラインの電子ファクシミリ版は、以下のリンク参照: [https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8449688c] (以上、2021/11/08 アクセス)
- 126) 以上、オンラインカタログ(上記註 125 参照)による。

#### 参考文献一覧

##### 聖バルバラ伝ほか一次文献

*Acta S. Barbarae* (1703). *Acta S. Barbarae virginis et martyris, patronae morientium, ex variis authoribus et antiquis monumentis collecta, ipso S. Barbarae festo imprimi coepta anno M.DCCIII.* Augsburg: Joannus Michaëlis Labhart.

*Acta sanctorum* (1643-1940). *Acta Sanctorum Bollandistarum.* Société des Bollandistes, Antwerp & Brussels, 66 Vols.

- Bartolomeo da Trento (2001). *Liber epigolorum in gesta sanctorum*. A cura di Paoli, Emore. Tavarnuzze (Firenze): SISMELE edizioni del Galluzzo.
- BHL (1898-1899, 1900-1901) *Bibliotheca hagiographica Latina antiquae et mediae aetatis*. Société des Bollandistes, Bruxelles.
- Drewe, G.M., Blume, Clemens & Bannister, Henry M. (1886-1922). *Analecta hymnica Medii Aevi*. 55 Vols., Leipzig : Fues's (R.Reisland).
- Memorie di S. Barbara* (1788). *Memorie di S. Barbara vergine e martire di Scandriglia, detta di Nicomedia, protettrice principale della città e diocesi di Rieti, raccolte ed esaminate da Monsig. Savrio Marini, vescovo della stessa città. Dissertazione*. Fuligno : Giovanni Tomassini Stampator vescovile.
- Mystère de sainte Barbe* (1885). *Le mystère de sainte Barbe, texte de 1557 publié avec traduction française, [...] par Emile Ernault*. In : Archives de Bretagne, recueil d'acte, de chroniques et de documents historiques rares ou inédits publiés par la Société des bibliophile bretons et de l'histoire de Bretagne, t.III.
- Viteau, Abbé Joseph (ed.) (1897). *Passions des saints Écatherine et Pierre d'Alexandrie, Barbara et Anysia, publiées d'après les manuscrits grecs de Paris et de Rome*. Paris : Librairie Émile Bouillon.

## 二次文献

- Amsellem, Emmanuelle (1999). Les Stigand : Des Normans à Constantinople. In : *Revue des études byzantines* t. 57, 283-388. DOI : <https://doi.org/10.3406/rebyz.1999.1979>
- Bakhuys, Diederik & Coudert, Marie-Claude (eds.) (2011). *Gérard David. La Vierge entre les vierges, un joyaux restauré*. Rouen : Musée des beaux-arts de Rouen.
- Baligand, Françoise & Carpentier-Bogaerd, Catherine (1997). *Sainte Barbe. Légendes et traditions*. Douai : Centre Historique de Minier de Leward.
- Chavannes-Mazel, Claudine A. (1988). *The Miroir historial of Jean le Bon. The Leiden Manuscript and its Related Copies*, diss. Leiden, 2 Vols. [Vol. 1 [https://www.academia.edu/47544818/C\\_A\\_Chavannes\\_Mazel\\_The\\_Miroir\\_historial\\_of\\_Jean\\_le\\_Bon\\_The\\_Leiden\\_Manuscript\\_and\\_its\\_related\\_Copies\\_diss\\_1988\\_vol\\_1\\_Text](https://www.academia.edu/47544818/C_A_Chavannes_Mazel_The_Miroir_historial_of_Jean_le_Bon_The_Leiden_Manuscript_and_its_related_Copies_diss_1988_vol_1_Text)] (2021年10月10日アクセス)
- Contamine, Philippe & Tesnière, Marie-Hélène (2013). Jeanne de France, duchesse de Bourbon, et son livre d'heures. In : *Monuments et mémoires de la Fondation Eugène Piot*, 92, 5-65. DOI : <https://doi.org/10.3406/piot.2013.2122> (アクセス 2021/08/25)
- Delale, Sarah (2021). *Le diamant obscur. Interpréter les manuscrits de Christine de Pizan*. Genève : Droz.
- Denomy, Alexander Joseph (1939). An Old French life of Saint Barbara. In : *Medieval Studies* 1, 148-178.
- Dondaine, Antoine (1946). Le Dominicain français Jean de Mailly et la Légende dorée. In : *Archives d'histoire dominicaine*, 1, 54-102.
- Douët d'Arcq, Louis (1848). Inventaire des reliques de la Sainte-Chapelle. In : *Revue Archéologique*, 5(1), 167-173. <http://www.jstor.org/stable/41745684> (2021/10/24 アクセス)
- Douët d'Arcq, L. (1855). Inventaire de ce qui se trouvait dans le château de Vincennes et dans celui de Beauté en 1420. (1854). *Revue Archéologique*, 11(2), 449-462. <http://www.jstor.org>

- org/stable/41746241
- Douët d'Arcq, L. (1863–64). *Choix de pièces inédites relatives au règne de Charles VI*. 2 Vols., Paris : Société de l'histoire de France.
- Douët d'Arcq L. (1879). Inventaire des meubles de la reine Jeanne de Boulogne, seconde femme du roi Jean (1360). In: *Bibliothèque de l'école des chartes*, 40, 545–562. DOI : <https://doi.org/10.3406/bec.1879.446856>
- Dunn-Lardeau, Brenda (ed.) (1986). *Legenda aurea : sept siècles de diffusion. actes du colloque international sur la Legenda aurea, texte latin et branches vernaculaires à l'Université du Québec à Montréal, 11–12 mai 1983*. Paris-Montréal : Vrin-Bellarmin.
- Fleith, Barbara (1991). *Studien zur Überlieferungsgeschichte der lateinischen Legenda Aurea*. Bruxelles: Société des Bollandistes.
- Guiffrey, Jules (1894–96). *Inventaires de Jean, duc de Berry (1401–1416)*. 2 Vols., Paris : Ernest Leroux.
- Hasenohr, Geneviève & Zink, Michel (dir.).(1992). *Dictionnaire des lettres françaises. Le Moyen Age. Edition entièrement revue et mise à jour*. Paris : Fayard.
- Henwood, Philippe (2004). *Les collections du trésor royal sous le règne de Charles VI (1380–1422). L'inventaire de 1400*. Paris : CTHS.
- Hicks, Eric & Moreau, Thérèse (trans.) (1986). *Christine de Pizan. Le livre de la Cité des dames*. Paris : Stock.
- Hourihane, Corum (ed.) (2014). *Manuscripta illuminata: Approaches to understanding Medieval and Renaissance manuscripts* (Index of Christian Art). Princeton: Princeton University Press.
- Holder, Alfred (ed.) (1970). *Die Handschriften in der Badischen Landesbibliothek in Karlsruhe*. Bd.V. *Die Reichenauer Handschriften, erster Band, die pergament Handschriften*. Neudruck mit bibliographischen Nachträgen. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Labarte Jules (1879). *L'inventaire du mobilier de Charles V, roi de France*. Paris : Imprimerie nationale.
- Laloue, Elisabeth (1992). Sainte Barbe (Mystères de). In : *Dictionnaire des lettres françaises. Le Moyen Age*, Hasenohr, Geneviève & Zink, Michel (dir.), Paris : Fayard, 1352–1353.
- Lemaire, J. Ch. (2009). Premières attestations lexicales dans le "Mystère de sainte Barbe en cinq journées." In : *Romania*, 127 (507/508 (3/4)), 500–510.  
[<http://www.jstor.org/stable/45039641>]
- Leroquais, Victor (1927). *Les livres d'heures manuscrits de la Bibliothèque nationale*. 3 Vols., Paris.
- Leroquais, V. (1934–1943). *Bréviaires manuscrits de la bibliothèques publiques de France*. 5 Vols., Paris.
- Lockwood, W.B.(1953). A manuscript in the Rylands Library and Flemish-Dutch and Low German accouts of the life and miracles of Saint Barbara. In: *Bulletin of the John Rylands Library Manchester*, Vol. 36–1, 23–37.
- Longtin, Mario (2003). Maçon, trois fenêtres, s'il vous plaît ! Le Mystère de sainte Barbe en cinq journées : un décor qui se construit ? In : *Par la fenestre : Etudes de littérature et de civilisation médiévales* [en ligne]. Aix-en-Provence : Presses universitaires de Provence. DOI : <https://doi.org.10.4000/books.pup.2219>. (2021/02/11 アクセス)

- Lusignan, Serge (1992). Vincent de Beauvais. In : Hasenohr & Zink 1992, 1480.
- Maggioni, Giovanni Paolo (ed.) (2013). *Jean de Mailly. Abbreviatio in gestis et miraculis sanctorum, supplementum hagiographicum. Editio princeps*. Firenze : SISMEL-Edizioni del Galluzzo.
- Mély, Fernand de (1892). *Bibliographie générale des inventaires imprimés*. T. 1, France & Angleterre. Paris : Ernest Leroux.
- Moranvillé, Louis (ed.) (1903–1906). *Inventaire de l'orfèvrerie et des bijoux de Louis I, duc d'Anjou*. Paris : Ernest Leroux.
- Nemitz, Rolforderich (2009). *Die Sammlung der Nemitz-Stiftung St. Barbara. Ausstellung im Deutschen Bergbau-Museum Bochum*. Bochum: Deutsches Bergbau-Museum Bochum.
- Nemitz, R. & Thierse, Dieter (1996). *St. Barbara. Weg einer Heiligen durch die Zeit*. Essen: Glückauf.
- Orth, Myra (2016). *A Survey of manuscripts illuminated in France. Renaissance manuscripts : The sixteenth-century*. 2 Vols., London-Turnhout : Harvey Miller-Brepols.
- Paulmier-Foucart, Monique, Lusignan, Serge & Nadeau, Alain (eds.) (1990). *Vincent de Beauvais : intentions et réceptions d'une œuvre encyclopédique au Moyen-Age*. Actes du XIVe colloque de l'Institut d'études médiévales organisé conjointement par l'Atelier Vincent de Beauvais (A.R.Te.M., Université de Nancy II) et l'Institut d'études médiévales (Université de Montréal) 27–30 avril 1988. Paris-Montréal : Vrin-Bellarmin.
- Phillips, Kim M. (2004). Desiring virgins : Maidens, martyrs and feminity in late medieval England. In : *Youth in the Middle Ages*, Goldberg, P.J.P. & Riddy, Felicity (eds.), Woodbridge : York Medieval Press, 45–59.
- Reinburg, Linda (2014). An archive of prayer: The book of hours in manuscript and print. In : *Manuscripta illuminata*, Hourihane (ed.), 221–239.
- Rézeau, Pierre (1982). *Les prières aux saints en français à la fin du moyen âge. Introduction. Les prières à plusieurs saints*. Genève : Droz.
- Rézeau, P. (1983). *Les prières aux saints en français à la fin du moyen âge. Prières à un saint particulier et aux anges*. Genève : Droz. [pp. 70–112]
- Richards, Earl Jeffrey & Caraffi, Patrizia (1998). *La città delle dame*. Milano : Luni.
- Robert, Léon & Labie-Leurquin, Anne-Françoise (1992). Sainte Barbe ou Barbara (Vie de). In : Hasenohr & Zink 1992, 1353.
- Runnalls, Graham A. (1999). *Les mystères français imprimés. Une étude sur les rapports entre le théâtre religieux et l'imprimerie à la fin du Moyen Age français suivie d'un repertoire complet des Mystères français imprimés (ouvrages, éditions, exemplaires) 1484–1630* (Bibliothèque du XV<sup>e</sup> siècle, 61). Paris : Champion.
- Sauvage, R.N. (1906). La chronique de Sainte-Barbe-en-Auge. In : *Mémoires de l'Académie de sciences, art et belles-lettres de Caen. Documents*, 1–69. [URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5458775z/f236.item.r=Sainte%20Barbe%20en%20Auge#>] (アクセス 2021/10/20)
- Stanton, Anne Rodolf (2014). Design, devotion, and durability in Gothic prayer books. In : *Manuscripta illuminata*, Hourihane (ed.), 87–107.
- Stones, Alison (2013–2015). *A survey of manuscripts illuminated in France. Gothic manuscripts: 1260–1320. Part one & two*. 4 Vols., Brepols-London: Harvey Miller.
- Van Dijk, Mathilde (2000). *Een rij van spiegels. De Heilige Barbara van Nicomedia als voorbeeld voor*

- vrouwelijke religieuzen*. Hilversum (The Netherlands): Verloren.
- Vaucher, André (1986). Jacques de Voragine et les saints du XIII<sup>e</sup> siècle dans la *Légende dorée*. In : Dunn-Lardeau (ed.), 27-56.
- Vincent, Catherine (1984). *Entre tradition et modernité : Les confréries dans les diocèses normands de la fin du XIII<sup>e</sup> siècle au début du XVI<sup>e</sup> siècle*. 2 Vols., thèse, Paris : Université de Paris X-Nanterre.
- Voorbij, J.B. (1991). *Het 'Speculum historiale' van Vincent van Beauvais. Een studie van zijn ontstaansgeschiedenis*. (Ph.D. Groningen University) Groningen.
- Weed, Stanley Edward (2002). *The Virgo inter virgines: Art and the devotion to virgins saints in the Low Countries and Germany, 1400-1530*. Phd dissertation, the University of Pennsylvania.
- Williams, Harry F. (1975). Old French Lives of Saint Barbara. *Proceedings of the American Philosophical Society*, 119(2), 156-185. Retrieved August 14, 2021, from <http://www.jstor.org/stable/986633>
- Wolf, Kirsten (2000). *The old Norse-Icelandic legend of Saint Barbara*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- 黒岩 (2020) 黒岩三恵 「フィリップ善良公の私的信仰：ハーグ、ミュンヘン、パリの3写本にみるトマス・アキナス祈祷文とイメージの関わり」『ことば・文化・コミュニケーション』立教大学異文化コミュニケーション学部紀要 12号、1-26頁  
(Permalink : <http://doi.org/10.14992/00019213>)
- 黒岩 (2021) 黒岩三恵 「『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷書』：祈りと彩飾写本の相互作用に関する試論」『ことば・文化・コミュニケーション』立教大学異文化コミュニケーション学部紀要 13号、1-46頁  
(Permalink : <http://doi.org/10.14992/00020593>)
- ムツァレツリ、M.G. (2010). 『フランス宮廷のイタリア女性：「文化人」クリスティーヌ・ド・ピザン』(伊藤亜紀訳)、知泉書館。